

ダンジョンに  
出会いは求めるのは  
間違える  
外伝

大森藤ノ

Fujino Omori

Illustration

はいむらぎよたか

キャラクター原案

ヤスダスズヒト

# ソード オラトリア

Sword Oratoria

5周年記念

書き下ろし付き  
スペシャルストーリー集

【外伝編】

ドレスアップ・アイズ  
着せ替え剣姫

五年前、アイズ十一歳のことである。

「アイズたん、着てる服小さくなってきたみたいやし、こつちの服に替えてみん？」

上級冒険者として頭角を現しつつあった当時のアイズの装備及び服装は、丈夫なレザーパンツに同系統のインナー、更にも上から胸当てを始めとした防具を纏うというものだった。

成長するにつれ胸や臀部の辺りがきつくなっていた装備品の状態を、ロキは目敏く見抜き、新しい衣装を片手に勧めてきたのである。

「……この服、薄くないですか？ 革の服の方が、丈夫じゃあ……」

「いやいやいや、アイズたん、コレは特注品やで？ 防御力は勿論、よく伸びるし動きやすいときどき！」

ロキの熱弁にも押され、アイズはこれまでより生地きじの薄いその服を受け取ることにした。

実際彼女の言葉通りその服は伸縮性に富んでおり、更に軽く、防具の下に身に付ける戦闘衣としては申し分なかった。

「新製品のスカートもらってきたでー。え、下着が見える？ スパッツを履けば問題なしや！」  
以後、ロキは最新の戦闘衣バトルクロスと言い張って、様々な服をアイズに装着させていった。

「高性能のロングブーツや。これは必ず履くこと。——絶対領域だけは絶対に譲れん」

無駄に性能が良く、かつ徐々に露出が多くなっていたロキの戦闘衣バトルクロスを着ていったアイズは。

「あ……これは、ちよつと」

「ダメやあー！ アイズたんはこれを着るんやーッ！ 着てくれなきゃ、うちは舌を噛み千切る!!」

気付けば、ティオナをして大胆と言わしめるほどの服を着るように陥れられていたのである。

「ぬふふつ、眼福やー。やつぱ冒険者はこれくらい薄着やないとなー」

「……」

そして、現在。ワンピースにもレオタードにも似たアイズの戦闘衣バトルクロスを見て、ロキは顔をだらしなく緩める。もう慣れてしまったとは言え、こうしてまじと見つめられると、生地が大きく開いて丸見えの背筋や脇わきの部分が熱を帯び、羞恥しゅうちに燃えるかのようだ。

頬ほほを紅色にじいろに染めるアイズを、ロキは心底羨しそうに眺め続ける。

「フヒヒ、アイズたん。実はもう、次回作の構想があるんや」

「……どんなもの？」

ゲスな笑みを浮かべるロキに、アイズは尋ねた。

「ずばり、バニースーツやー」

後日、しばき倒されたロキがホームの中庭で発見されることになる。

ていおにゃん

「にゃん♪」

「……」

重苦しい沈黙がフィンを襲った。

目の前には自分の部下であるティオナ。その頭には獣人と見紛う猫耳、そして美しく張りのある臀部からは尻尾が生えている。どうやら耳と尻尾の飾りがついたヘアバンドとパンツを身に付けているらしい。

フィンがホームの書庫で調べ物をしていた時だった。無言で入室してきたティオナは——既にこの時猫耳と尻尾を装着していた——椅子に座っているフィンの前につかつかと歩み寄り、片手を上げ「にゃん♪」と、一種の精神攻撃に近い一連の動作を繰り返してきたのだ。

机の上の上って、四つん這いで。女豹の姿勢である。

「……何をしているんだ、ティオネ」

「実は、ロキが『猫耳と尻尾をつけて』にゃん♪と鳴けば男はキュンキュンッすること間違いないしや！」と豪語していたので、うふふつ、団長にぜひ実践を……」

あの主神なんとかしないと、と胸中で呟くフィンに、一方のティオネは微妙に胸の谷間

を強調しながら熱い視線を送ってくる。フィンは静かに身を引いて間合いを取った。

「団長……今の私、どうですかにゃん？ キュンッ、つてきましたかにゃん？」

ゾクツときた——という言葉はフィンは何とか堪えた。

しなを作っているが、これは猫の耳を纏った凶暴な肉食獣だ。下手に刺激すべきではない、とそう判断する。彼は無言で、かつ無難にティオネの頭を撫でた。

片目を瞑り、アマゾネスの少女はくすぐったそうに体をよじる。

「えへへえ……それじゃあ、団長、はい。お揃いですにゃん？」

すぼつ、と頭に取り付けられるヘアバンド。装着される猫耳。完成する子猫型フィン。

どこから取り出しやがったにゃん。

「だ、だんちよ……すごく可愛つ……ダメツ……我慢できなつ……食べたい……！」

発情している……！

頬を上気させうわ言を呟く肉食獣に、身の危険を感じたフィンは脱兎の勢いでその場から逃げ出した。間髪入れず、モンスターより恐ろしい百獣の王が後を追ってくる。

ホーム中を駆け回るその愛くるしい子猫姿の団長に、団員達は男女問わず胸をときめかせ、一層の忠誠を彼に誓うのだった。

## 合体事故

「あ、あのっ、ティオナさん！ 不必要にアイズさんに抱き付き過ぎじゃないでしょうか!?」  
 【ロキ・ファミリア】のホーム、その応接間にて。

レフィーヤは、ティオナに向かって吠えた。

「え？ そうかな？」

「そ、そうですよ！ ことあるごとに、ティオナさんはアイズさんに抱き付いています！」

この場には今、レフィーヤとティオナの二人しかない。ソファアの上で間延びした声を出すアマゾネスの少女に、エルフの少女は語気を強めてもの申す。

これまでずっと思っていたことだ。ティオナはレフィーヤの前で何度もアイズに抱き付いてはじゃれ付き、とても羨ましい——ではなく、少々目にあまるところがある。風紀のため

にも彼女に言って聞かせなくては、と本音を隠す建前を築いて、レフィーヤは注意を促した。

「親しき仲にも礼儀あり、という言葉もあるくらいなんですから、ティオナさんも……」

「あたしとアイズは『親しい』よりずっと上の仲だから、大丈夫だっつ〜」

天真爛漫に笑うティオナに、ぐぬぬぬっ、とうなるレフィーヤ。

「そんなに言うんだつたら、レフィーヤもアイズに抱き付いちゃばいいじゃん」

「そ、その理屈はおかしいです!?!」

なんてことのないように告げてきたティオナの言葉に、レフィーヤは仰け反りながらズザザツと後退った。その顔も、エルフ特有の尖った耳も赤く染める。

ティオナはそんな彼女の様子もお構いなしに「よっ」と言ってソファアから立ち上がる。

「じゃあ練習しよ、練習。あたしがアイズの代わりになつてあげるから、抱き付いてきて！」

「ティ、ティオナさん、なに言つて……!?!」

恥ずかしがっているは何もできないとばかりに笑いかけてくるティオナ。レフィーヤは最後まで乗り気ではなかったが「アイズの体ってひんやりして柔らかいよー」という文句に、ごくり、と喉を鳴らした。

ティオナに抱き付けばこれは間接抱擁ではないか——という浅はかな邪念が彼女を侵す。

長い逡巡を経た末、ふらふらと歩み寄ったレフィーヤは、えいやっ、と抱き付いた。

「あ、アイズ!?!」

そしてティオナと合体したその瞬間、アイズが応接間に姿を現す。

瞳目して驚愕をあらわにしている彼女に、正面からティオナと抱き合っているレフィーヤ

は、凍り付いてしまった。

「……ごめんね。あっち、行くから」

「ちょ——ア、アイズさんっ!?! 誤解です——————っ!!」



テイオネの言葉通り厄介な冒険者依頼に、アイズ達がそれぞれ顔を見合わせていた中、ロキが他人事のように言う。えつと視線が寄せられるのも構わず、アマミッドへ質問を投じた。

「冒険者依頼つちゆうからは、報酬として、うちらもおこぼれに与れるんやろうな？」

「勿論です。『ユニコーンの角』を入手した暁には、きちんと分け前を提供します」

「ふひつ、オッケーや。その冒険者依頼、受けたる」

「ちよつとっ！」「ロキいゝつ」

貴重な品には目がない好事家でもあるロキは勝手に承諾してしまふ。テイオネやテイ

オナの響聲の声が上がるが、主神の特権とでも言うように取り合わない。

「ふはははははつ、決まりだな！」とディアンケヒトが豪快に笑った。

「それで具体的にはどうするんや？ ユニコーンが相手や、生け捕りなんてことはできんやろ」

「はい。ですので、純潔性に惹かれるという、ユニコーンの習性を利用します」

「純潔性……ああ、乙女の懐に抱かれて、ちゆうやつか。処女で捕獲隊組むんやな」

「しよ、処女……!?!」

『古代』からの伝承の一つに、地上に進出したユニコーンの群れはとある森の中で美しい精霊の少女と戯れ、心を通い合わせたという一節がある。以来ユニコーンは清らかな精霊のように汚れない存在——人類で例えるなら純潔さに満たされた処女に惹かれ、その懐に抱かれて眠りこけるといふのだ。伝承の真偽はともかく、その一角獣の習性は実際に確認されている。

レフィーヤが真っ赤になって呻くのを横に、ロキは一人納得し話を進めた。

「んゝ、じゃあやつば、うちからはこの四人娘を出すか。一角獣より凶暴な生娘達やけど」

「こちらからはアマミッドを参加させよう！」

主神同士の決定に、はあ、と団員達の間から溜息が漏れる。

既に諦めていたテイオネ達は、ほどなく冒険者依頼の参加を受け入れた。

「えつと、もうユニコーンを捕まえずにはいけないのは仕方ないとして……テイオネさんと

テイオナさんは、その、て、真操は……?」

男を食いあさるといふ女種族への先入観が強いのか、頬を染めるレフィーヤは、テイオネ達

に純潔の有無をつい確認しようとする。

「私の操は団長だけのものよ」あたしも男遊びしたことない」

アマゾネスの双子の姉妹はあつげらかと答える。テイオネに至っては誇らしげだ。

未だ顔が赤いレフィーヤは「そ、そうですか」と納得した。

「アマミッドは僕の補佐だ、ホームに帰ってやつてもらわなければならんことは山ほどある、

よつてこの冒険者依頼の期限は三日だ！ ふははははははは！」

「三日……」

つまり、最長で三日も都市の外に滞在しなければいけない。それだけの時間があれば迷宮探索、あるいは鍛練に打ち込みたいと考えるアイズは、内心参加を渋りたい思いだったが、

「アイズも行かなきゃ駄目だよ」ぬふつ、強制参加やで、アイズたん」  
 「……」  
 背後から抱き着くティオナと、正面で下卑た笑みを浮かべるロキによって逃げ場を失い、参加を余儀なくされるのだった。



ユニコーンの目撃情報は都市の真北、山の麓の森林と隣接する草原地帯に集中していた。冒険者依頼が発注された翌朝。前日から辟易するようなギルドへの長い手続きをようやく済ませ、アイズ達はアミッドとともにギルドの北門を出発した。

「ところでさあ、アミッド、何でユニコーンって生け捕ることができないの？」

「ユニコーンは気高いモンスターなので、捕獲すると逆上し、己の命を絶ってしまうのです」都市最大派閥がユニコーン捕獲に乗り出したと早くも情報が出回ったのか、道すがら多くの冒険者——狩猟者達があの手この手でアイズ達の行く手を阻もうとしてきたが、彼等は軒並み返り討ちにあった。冒険者依頼を完遂するためにも狩猟者の存在は邪魔なため、正当防衛という盾を振りかざし、アイズ達も索敵しては彼等を撃退していく。

「あ——み、みなさん！」

あらかた狩猟者を片付け、モンスターの足取りを追い捜索することしばらく。小高い丘に登ったところでレフィーヤが指をさす。彼女の示す先を見たアイズ達は、一様に息を呑んだ。

白く輝く馬の体軀。しなやかな肢体から尻尾の先まで包む白い毛並みは処女雪のようだ。額から伸びた一本の長い角は根もとから緩やかに螺旋が刻まれ、鋭く尖った先端へと続いている。称された『聖獣』の名に偽りはないように、草原を進むその姿は清らかで美しい。

稀少種、ユニコーン。

「うわ、初めて見た」

「綺麗ね、本当に……。モンスターのくせに」

惚れ惚れしたような響きを乗せながら、ティオナとティオネが呟く。アイズも僅かに目を細め、視線の先のユニコーンをしばし眺めた。

よく見ると、白い毛並みはとどころ掠り傷を負っている。恐らく狩猟者達の攻撃や罠に何度も晒されてきたのだろう。何度も首をもたげては辺りを見回しているユニコーンは、周囲の気配に神経質になっているようだ。小高い丘からその光景を観察するアイズ達は、身を伏せて見つからないようにしつつ、その場で作戦会議を始めた。

「じゃあ、まず誰が行く？」

「え、一人ずつ行くんですか？」

「当たり前じゃん、レフィーヤ！ あたし達がいつペンに行っても、ユニコーンもどこに行こ

うか迷って困っちゃうって！」

「……迷う云々は置いておくにしても、一理あるかもしれません。複数で近付くと警戒される可能性があります」

一人ずつユニコーンへ接触を試みるというティオナの提案に、アミッドが賛成を示す。そういうことなら、とアイズやレフィーヤ、ティオネも同意した。

「結局、最初は私達なのね……」

「どっちがユニコーンに気に入ってもらえるか競争ね、ティオネ！」

一番乗りを名乗り出た妹に引つ張られる形で、ティオネ達アマゾネス姉妹が最初にユニコーンを攻略することになった。アイズ達が丘から見守る中、二人はモンスターに近付いていく。

「それにしても、ユニコーンを懐柔して……どうすればいいのかしら？」

「簡単じゃん！ 犬とか呼ぶ感じでやればいいんですよ！ おーい、おいでー！」

姉を置いてユニコーンの前にたつと躍り出るティオナ。前触れなく現れたことで驚くユニコーンの反応もお構いなく、ティオナは両手を広げ「おいでー」と満面の笑みを浮かべる。

ユニコーンは珠玉のような青い瞳をじつと彼女に向けていたが、やがて興味を失ったようにふいっと背を向けた。

「あれえー？」と首を傾げる妹に嘆息しつつ、次はティオネが出る。

怯えさせないように用心して歩み寄った彼女は、どうすれば近付いてくるのか悩み、散々

逡巡した後、とりあえず「にこっ」ときこちなく笑いかける。

ユニコーンはぞんざいにティオネへ一瞥をくれると、速攻でそっぽを向いた。

「あはははははっ！ ティオネ、興味も持たれてない！」

「あんたも似たようなもんでしょ!？」

げらげら笑う妹に怒り狂う姉。

丘に戻ってきた二人をまあまあとため、今度はレフィーヤが赴く。

「きゃっ……！」

おどおどしながらやって来た彼女に、ユニコーンは一旦は近付いたものの、彼女が恐る恐る手を伸ばした瞬間、ぶるるっと唄いて距離を取ってしまった。

ああ、とティオナ達から声上がる。

「何だかあのユニコーン、気難しくない？ ちつとも隙を見せてくれないだけどー」

「簡単にいくものじゃないんでしょ、きつと。調教と似たようなものよ」

「先は長そうです……」

若干意気消沈して帰ってきたレフィーヤを迎えつつ、ティオナとティオネが愚痴をこぼす。白銀の髪を揺らすアミッドは少々申し訳なさそうな顔を浮かべ、アイズと視線を合わせた。

「アイズさん……次はどちらが行きますか？」

「……それじゃあ、私が」

「頭張れー! とテイオナに送り出され、アイズは出陣した。青々とした美しい草原が広がる中、首を折って草を食んでいたユニコーンは、ゆっくりと近づいてくるアイズに——ばっ、と顔を上げた。

間合いを残し対峙する金髪金眼の少女に目の色を変え、その角を差し向け、身構える。

(あ、警戒されてる)

(警戒されてるわね)

(警戒されてます……)

(ただならぬ雰囲気警戒されています)

人とモンスターの間でゴゴゴッと厳しい波動のやり取りが生じているのを、テイオナ達は確かに見た。ユニコーンは必死に体の震えを堪えている。

肩を落とすとロボトボと帰ってくるアイズと入れ替わるように、最後にアミッドが出た。

「……」

草原まで足を運んだアミッドは、何か思案する素振りを見せた後、その場へ腰を下ろした。

膝を崩した彼女とユニコーンの視線が絡まる。透明な空気を纏う美しい貞淑な少女に、白い角獣は一步、二歩とゆっくりと近寄ってきた。おおつ、とテイオナ達が丘から乗り出す中、ユニコーンはどうとうアミッドの側に辿り着き、膝を折り、その頭を彼女の膝の上に乗せた。

蒼穹の下、ユニコーンが完全に身を横たえる。

草原に腰を下ろした少女と、その膝の上で眠りにつく一角獣。その光景はまるで一流の画家が手がけた一枚の絵画——あるいは童話の一頁のように、アイズの目には見えた。

「……っ」

やがて、アミッドが手を腰に回す。服の影に隠してあった短剣を、鞘から引き抜いた。

脇を閉じているユニコーンの角へ、悟られぬよう銀の剣身を伸ばしていき、刃が触れるか否かの間際——モンスターの双眸が勢いよく開いた。

アミッドをはね飛ばすように立ち上がり、高く嘶いて走り出していく。

「アミッド、大丈夫!？」

「え、ええ……無事です」

アイズ達は慌てて丘から飛び出し、草原の上に倒れたアミッドのもとへ駆けつけた。彼女は弾き飛ばされた短剣を呆然と見やつた後、懺悔するような眼差しでユニコーンを見つめた。

「あのユニコーンはここに来るまで何度も狩猟者に狙われ、非常に敏感になっているようです。恐らく……必要以上に人を警戒しています」

アイズ達と大きく距離を隔てたユニコーンは、あたかも裏切られたと怒るように再び嘶き声を上げ、背を向けて走り去っていく。テイオナも、テイオネも、レフィーヤも参ったような顔を作った。アイズはアミッドを立ち上げられる傍ら、ユニコーンが去っていった方角を眺める。その日はユニコーンの後を追うも成果は上げられず、その翌日も徒労に終わってしまった……

とうとう、冒険者依頼最終日にもつれ込んでしまおうのだった。

今日こそは何としても、と意気込むアイズ一行は、深い森の中を進んでいた。山の麓に広がる森林に逃げ込んだユニコーンを追って、鬱蒼とした木々の群れをかき分けていく。

「でも実際、もう私達はユニコーンに警戒されちゃってるわけでしょ？ 『角』を手に入れて、かつユニコーンを逃がすっていうのは正直厳しいんじゃないの、アミッド？」

「……かもしれません」

ユニコーンをもとの住処に帰すという目的はあくまでアミッド個人の望みであり、派閥の意向としては確実に『ユニコーンの角』だけは入手しておきたい、というのが実情だ。

決断の時が迫っている。曇るアミッドの横顔を見ながら、アイズ達はそう察していた。ややあって、ユニコーンは見つかった。木々が開けた、青い小川のほとりだ。

こちらの気配に気付きじっと睨みつけてくる一角獣に、アイズ達は動けずたじろいでしまう。

「——ここにいたか」

「えっ……リ、リヴェリア様!？」

そんなアイズ達のもとにやって来たのは、馬に乗ったリヴェリアだった。レフィーヤが驚くのを尻目に、彼女は慣れた動きで鞍から降りる。

「リヴェリア……どうしてここに？」

「ロキの言い付けた。冒険者依頼に出ているお前達に、手を貸してやれとな」

アイズの疑問にリヴェリアは億劫そうに答える。詳細は説明されていなかったのか、アミッドから冒険者依頼の内容を聞いた彼女は「何だ、そんなことか」と口にする。

「リ、リヴェリアっ？」

テイオナの声を背中で聞きながら、リヴェリアはユニコーンに歩み寄った。ユニコーンは一度身構えかけたが、彼女の緑玉色の瞳と視線を絡めると、ゆっくりと緊張を解き、間合いに入ることを許す。

そっ、と伸ばされる手に一角獣は頬を寄せる。啞然とするアイズ達。

「故郷の森……王族の里でもユニコーンを一頭、飼っていたからな。慣れたものだ」

ユニコーンの首を撫でながら何てことのないように語られ、アイズ達は今度こそ言葉を失った。気性が荒い迷宮のユニコーンと比べれば可愛いもの、とのたまう彼女に汗が流れる。

瞳を閉じて身を委ねるユニコーン。あつという間にモンスターの手懐けてしまったリヴェリアに、レフィーヤは「リヴェリア様、調教の才能もあるんじゃないやあ……」と王族の多才ぶりに畏怖の眩きを漏らす。

「すまない、お前の角を私達に分けてくれないか？ 悪いようにはしない」

角を奪おうとするのではなく、語りかけてくるリヴェリアに、ユニコーンは細く嘶き己の角を差し出した。刃を、と呼ばれたアミッドが慌てて駆け寄り、短剣を手渡す。

優しく丁寧<sup>ていねい</sup>に、そしてあっさり切り取られる『ユニコーンの角』。  
冒険者依頼<sup>くわえんしやいぱん</sup>が完了<sup>ていじ</sup>してしまった。

「この子の群れには私が連れて行こう。お前達はもう帰れ」

都市の商人に借りた馬に再び騎乗したリヴェリアは、ユニコーンを隣に従え、霊峰と呼ばれるアルプ山脈<sup>アルプ</sup>の方角へと進路を取った。蹄<sup>ひづめ</sup>の鳴る音を残し、森の奥へと消えていく。

一人で冒険者依頼<sup>くわえんしやいぱん</sup>を片付けてしまったエルフの王女に、取り残されたアイズ達はしばらく立ちつくした。ともすれば何とも言えないやるせなさに身を包まれ、乾いた風が森の木々をざわざわと揺らす。

顔を見合わせたアイズ達は、やがてすごすごと、都市への帰路につくのだった



「ねえ、ロキー。最初からリヴェリアに行ってもらえばよかったんじゃないの?」

冒険者依頼<sup>くわえんしやいぱん</sup>が終了し数日後。ホームにてテイオナは口を尖らせながら言った。

自分達は三日間散々苦労したにもかかわらず、リヴェリアは容易くユニコーンを手懐けてしまったのだ。不満が漏れるのは当然で、テイオネも「全くよ」と同意する。

「まあ、そりゃアレや、アレ……テイオナ達が滑稽<sup>こっけい</sup>な真似<sup>まね</sup>する方が、面白そうやったし」

ニヤニヤと、ロキはこれ見よがしに笑った。それを見たテイオナとテイオネは眉<sup>まゆ</sup>を逆立て、その場から逃げ出した主神を「待てえーっ!」と猛追走する。

苦笑するレフイーヤとともにアイズが後を追うと、「ぐええっ!」とエントランスホールでロキが取り押さえられるところだった。

「……お取込み中でしたか?」

とその時、館の扉が開き、来客が訪れた。門番に案内されたアマミッドは、ロキを一番下にして玄関口で倒れ込むテイオナ達を見下ろしながら小首を傾げる。

「アマミッドさん? ……あ、もしかして?」

「ええ。冒険者依頼<sup>くわえんしやいぱん</sup>の報酬<sup>せうごん</sup>を渡しにやってきました」

ばたばたとロキに折檻<sup>せつかん</sup>を加えるテイオナ達を足もとに、アイズとレフイーヤが迎えると、アマミッドは小さく微笑<sup>ほほえ</sup>み、小脇<sup>こわき</sup>に抱えていた品を差し出す。

巻かっていた布を解くと、アイズとレフイーヤは思わず感嘆した。

「『ユニコーンの角』を素材にして作りました。泥水<sup>どろみず</sup>であっても毒水<sup>どくみず</sup>であっても、全て清浄なものへと変えます」

「綺麗……!」えっ、なになに? 『ほお、こりや見事やな!』

アイズの手の中を覗き込むように、レフイーヤが、テイオナとテイオネが、ロキが左右から顔を出しそれを見下ろす。

一角獣の角の面影を残す、金と銀の意匠を凝らされた純白の杯。  
いかなる毒物も浄化する『ユニコーンの杯』を手に、アイズもまた、顔を綻はこばせるのだった。

アイズ・ヴァレンシユタインは白兎の夢を見るか

また夢を見ている。

あの冒険者の少年と出会ってから、夢を見ることが多くなった、とアイズは思う。

今回の夢には、幼いアイズと真つ白な毛並みの兎が出てきた。

兎は一風変わった格好をしていて、黄色の上着とこじやれた短刀の玩具を身に付けている。くりくりとした赤い瞳は可愛らしい。白兎は、遅刻だ遅刻だー、と首から吊るした懐中時計

を見て、二本足でびよんびよんと飛び跳ねて走っている。

一方の幼いアイズはというと……白兎に対してその金色の双眸をきらきらと輝かせており、待て待てー！ と後を追いかけていた。

年は五歳くらいだろう。この頃のアイズは、今の彼女しか知らない者達が聞けば驚くほどお転婆だった。幼いアイズは元氣よく走り回り、やがて白兎を捕まえることに成功する。

「やったー！」と続く歓声の後に『キュ!?』と響く驚きの鳴き声。幼いアイズはとても嬉しそうな顔で白兎の長い耳を掴んでいた。両手で。ふらんぶらん、と狩猟された獲物のごとく宙吊りになる兎は、慌てふためきながらバタバタとその短い手足を振っている。

外側から一部始終を見守っていたアイズの体は、動くことができた。流石に見兼ねてしま

い——後は見えていて恥ずかしくなってしまう——幼い自分のもとへ歩み寄る。はしゃいでいる彼女の肩を叩いて、「駄目だよ。」と注意する。

えー？ と口を尖らせる彼女から白兎を助け出す。両手で抱き上げると白い毛並みはもふもふとしており、えも言われぬ気持ち良さを感じしていると——ふと、気が付いた。

『ビ……ヒイツ』

白兎が、怯えている。

がたがたと震え、その円らな深紅の瞳も揺らしていた。悲鳴まで漏らす兎は呆然とするアイズの隙を突き、バツと手の中から脱出する。そして、びゅーん、と全速力で逃走した。

固まるアイズの隣から「あーあ」と幼い自分が顔を出し、じろー、と半眼で見上げてくる。

アイズは途轍もない衝撃を受け、その場で立ちつくすことしかできなかった。

「……夢」

カーテンの隙間から差し込む朝日を浴び、アイズは、むくりと目を覚ました。

あまりにもあんまりな夢の内容に、体が汗をかいている。彼女はベッドを下り、シャワーを浴びるためふらついた足取りで部屋を出た。力なく、頼りなく、哀愁を漂わせながら。

約十日後、アイズの見たその夢は正夢となる。

## 惚れ込んだ理由

六年前のことだ。アイズの身長がまた頭一つ分低かった頃、ベート・ローガは「ロキ・ファミア」に加わった。どういった経緯で彼が入団することになったのかは知るよしもなかったが、既に実力主義の塊であった狼人の青年は、当時のアイズをこれでもかと見下していた。「はっ、こんなガキが本当に使えるのかよ。その人形みてえな顔に傷が付く前に、巢に引つ込んだ方がいいんじゃないか」

「……」

「役にも立たねえ女とガキほど、始末に終えねえもんはねえっての」

高い目線の位置から見下ろしてくる琥珀色の双眸は、常に機嫌が悪そうだった。額に刻まれた青い刺青を歪め、フィンやリヴェリア達の目の前で堂々と、何かとつけてはアイズのことを嘲弄した。ともすれば、さっさと泣き喚いて失せろ、と言わんばかりの口振りであった。

無茶論、アイズとていい気分はしない。フィン達にしかわからない程度には膨れ、青年の顔をやや尖った目付きで下から見上げる。彼女の第一印象は、意地悪な人だ、というものだった。

「おい、ガキ。邪魔にならねえように後ろで震え上がってろ」  
そして、ベートを加えての初めてのダンジョン探索。

難なく『下層』へと突入しモンスターの群れに出くわすと、ベートはいつもの調子でそのように告げた。意識すると『足の速い俺が片付けるからお前は後ろで待機している』という指示だったが——柳眉を吊り上げるアイズは、彼の言い付けを無視した。

一瞬でベートの真横を抜いて、抜剣し、大型級のモンスター『トロール』の群れへと疾駆する。小柄な体でありながら敵の太足を縫うように斬りつけ、体軀を地に落とし、首なしし胸部へ一撃を見舞い撃破する。モンスター達が全滅するまで、あつという間の出来事であった。

「なっ……」

「返り血の一滴も浴びず、剣を振り鳴らす金眼金髪の【劍姫】の姿に、ベートは瞠目した。

「——とまあ、こんな感じでベートはアイズさんにメロメロになったんや」

「ええーっだ!」

「今のどいで!」

「アイズさん、トロールを斬殺しかしてませんよ!」

ホームの談話室、アイズとベートの昔話を語るロキに、ティオナとティオネ、レフィーヤが驚愕と戸惑いの声を上げる。

真剣な顔でカードゲームに興じるアイズとベートは、騒ぐ彼女達を見て、「ん?」「ああ?」と首を傾げるのだった。

## 策士魔導士純情系

「ヒュゼレイド・ファラーリカ」!!」

「次だ!」

アイズ、テイオナ達姉妹の視線の先で、『魔法』が次々と発動していく。行われているのは魔法の訓練であり、リヴェリアの指導のもと、レフィーヤが休むことなく詠唱を重ねていた。場所はダンジョン5階層。攻撃魔法の試射、及び訓練は当然のことながら場所を選ぶ。地上で余計な被害を出さないためにも、魔導士達は人気のない迷宮の奥深くへ赴き魔法を試すのが通例であった。

例に漏れず、レフィーヤも階層西端に位置する広大な『ルーム』に陣取り鍛錬をしている。

「あつ……!」

「レフィーヤっ」

過度な魔法の行使により地面に膝をつくレフィーヤを、アイズは支えようとする。

「来ないでください、アイズさん!」

「!」

「私のもつとつ、自分を追い込まないといけないんです……!」

差し伸べる手を頑なに拒むレフィーヤは自らの力で立ち上がり、訓練を再開させる。

リヴェリア曰く、魔法使用回数——精神力を手取り早く増やすには、体力と同じ、心身を痛めつけ己を鍛えることだ。詠唱の高速化も同時に教え込む彼女の教えは酷烈で、ふらつくレフィーヤは今にも倒れそうである。しかし彼女は甘えず、屈さず、己の体を酷使し続ける。アイズ達に追いつこうと、彼女もまた必死になって高みを目指していた。

「——【レア・ラーヴァテイン】!!」

はらはらとアイズが見守る中、召喚魔法からのリヴェリアの極大火炎魔法が放たれる。

紅蓮の炎柱が無数に突き出る最中、とうとう、レフィーヤはがくりと地面に倒れ込んだ。

「精神疲弊か……アイズ、バベルの治療施設に運べ!」

「うん」

リヴェリアに言われた通り、アイズは駆け寄ってレフィーヤの細い体を背負った。

「……幸せそうねえ」

「もしかしてレフィーヤ、アイズに運ばれたいから必死に頑張ってたか?」

「強く在りたいと望む心は本物だろうが……まあ、半々と言ったところか」

テイオネ、テイオナ、リヴェリアが口々に述べる中、気を失っているレフィーヤは、アイズの背中ですこぶる幸福そうな顔を浮かべている。一石二鳥とばかりに、訓練で体を鍛えつつ、ちゃっかり己への褒美を忘れない少女は、策士であった。

## 恋せぬ乙女

「団長、待ってください〜い」

まるで花畑が咲くような甘ったるい声を出す実姉の姿を、ティオナは視線で追いかける。菓子でも作ったのか、籐籠を片手にフィンに逃げられたティオナは、ふとその視線に気付いた。

「何よ、じっと見ちゃって」

「ん〜……よくそんな夢中になれるなー、つて」

フィンを慕うようになって、以前とは随分と変わってしまったティオネのことをあらためて観察する。同時によくもそこまで飽きずにのめり込めるものだ、とティオナは感心していた。「ふんっ、愛の力は偉大なのよ。あんたは気になる雄の一人や二人いないわけ？ アマゾネス云々以前に女でしょ？」

女兒しか産まない女戦士は他種族の異性を選び好みして伴侶、あるいは子孫を残すための道具とする。特別な感情を抜きにしても、強い男を目にしたら、舌舐めずりしてしまうのが普通のアマゾネスというものだ。全く異性に熱を上げようとしないティオナはむしろ珍しい。

フィンの前では戦闘能力が二割増し、いや五割増しするティオネは誇らしげに愛の素晴らしさを語ってくるが、ティオナは「そんなこと言っちゃってさ〜」と腕を組む。

気になる雄、身近な異性……フィンは違う、ベートは絶対嫌だ、ガレスはおじさん過ぎる、ラウルはピンと来るものがない。そもそも、自分の男の好みとは何だろるか。

う〜んと懊悩するティオナに、ティオネは呆れ顔で「わかったわ」と手を振る。

「いくつか質問するから答えなさい。考えちゃ駄目よ、直感のまま言うの」

「わかった！」

そしてティオネは矢継ぎ早に尋ねた。

「今ぱつと思ひ浮かんだ種族は？」「ん〜、ヒューマン！」

「好みの年齢は？」「同年代……それか年下！」

「性別は？」「男！……って、何その質問!?!」

ティオナの声を無視してティオネが下した結論は、「あんたの好みはヒューマンで同い年以下の男よ！」という随分と短絡的な答えだった。少々納得がいかない気もするが、ティオナはそうだったのか〜と頭上を見上げ思案する。

しかしやはり、未だに異性の理想像は浮かんでこない。

「……ま、いいや。男とかあんまり興味ないし」

辿り着いた結論に姉から文句を言われる中、彼女はけげんと笑った。

速くない将来、ティオナはある少年の応援者になる。

## 特訓ブーム

「よし、模擬戦やるうぜ！」

「乗った！」私はダンジョンに行くわ！」

【ロキ・ファミリア】のホームはいつにない熱気を帯びていた。

アイズの【ランクアップ】、Lv. 6到達から数日後。【剣姫】の偉大な功績に触発され、自分達も高め合おうと、派閥内では下部構成員を中心に特訓の流行が巻き起こっている。

ダンジョン深層域を開拓する『遠征』を前におきながら、特訓に励んで体を休めようとしないそんな団員達を見て、フィンを始めとした首脳陣は参ったねと苦笑しながらも、高まっている士気には歓迎的だった。ロキもまたニヤニヤと笑いながら子供達のことを見守っている。

「あ、あの、私も特訓に……!?」

「悪いなレフィーヤ、この特訓は三人用なんだ」

次々と団員達が出払っていく中、慌てふためくレフィーヤは気が付けば一人になっていた。

「で、出遅れた……!?」

機を逸したレフィーヤはすっかり人気なくなつたホームに取り残されていた。

流行に乗り遅れてしまい「ううっ」と項垂れていた彼女だったが……ホームの廊下を通りか

かったアイズが、ひよい、と顔を覗かせる。

「レフィーヤ……? どうしたの?」

「じ、実は……」と事情を話すと、金髪金眼の美少女は、首を横に傾けて尋ねてきた。

「それじゃあ、私と一緒に特訓する?」

「ほ、本当ですかっ!?」

アイズの申し出にレフィーヤは歓喜した。二つ返事で承諾する。

これは私、一人勝ちでは——!!

憧れのアイズとの二人だけの特訓に、エルフの少女は胸を高鳴らせる。

「それじゃあ、追いかけてこをしようか……相手の体に触れたら、逃げる役を交替」

「はいっ！」

移動と回避、そして読み合いの基本訓練に、レフィーヤは嬉しそうに頷いた。

「ア、アイズさんっ、待って……!?」

ホームの中庭で残像を残し逃げ回るアイズ。既に足にキいている魔導士は盛大に息を切らし、その手は虚しく空を切るだけだった。真面目に特訓をこなす少女を視認できない。

根気と耐久勝負も求めてくる【剣姫】の特訓は、苛烈につきた。

約十二時間、レフィーヤはアイズを一度も捕まえることができず、とうとうぶっ倒れた。

## アマゾネス流喧嘩術

その光景を最初に目にしたのは、レフィーヤだった。

「——ッッ!!」

ホームの中庭で、双子のアマゾネス姉妹が血だらけになって戦闘を繰り返している。

「け、喧嘩!? テイオナさんっ、テイオネさんっ、止めてください!」

凄まじい拳と蹴りの応酬を繰り返す両者の間に割って入り、レフィーヤは止めにかかる。

「姉妹喧嘩? 違う違う、レフィーヤ」ただの組み手よ。昔からよくやってるわ」

「……ええっ?」

複数の打撲の痕、更に唇や額から血を流しながら、女戦士の姉妹はあっけらかんと答える。

困惑するレフィーヤの前で、プツと血の交ざった唾を吐いたテイオネは補足した。

「アイズに【ランクアップ】されて、先に行かれたからね。悔しいじゃない?」

「居ても立ってもいられなくなってさ。二人で久々に戦い合おうって」

付け足されるテイオナの言葉も聞いてレフィーヤは「そ、そういうことですか」と返す。

つまりは訓練だ。容姿はもとより実力も同等の双子の姉妹、気心も知れておりこれ以上の練

習台はないだろう。喧嘩も含めて、小さい頃からこのような殴り合いは日常茶飯事だったと

言う。というより、己との半身との戦いを経て、彼女達はお互いを高め合ってきたらしい。

「Lv. も一緒だし、『深層』まで行つてモンスターを狩るより【経験値】も入りそうなんなんだけどね。本気で戦ってるし」

「私達の場合、繰り返し過ぎて碌に評価されないのかもしれないわ。目新しさがなくて」

ボロボロになってけられけら笑う妹と、同じくボロボロのまま冷静に考察する姉。

物騒な会話というか、女戦士の気質や文化の一端を垣間見たレフィーヤは汗を流す。

「ま、それに喧嘩だったら私の方が勝ち越してるしね。今更ムキになる理由なんてないわ」

「え、テイオネなに言っているの? あたしの方が勝ってるよ」

「——はよ?」

眉を上げた妹に対し、姉は殺気を帯びた声を出す。

「九百九十九回やってあたしは四百勝してるもんっ。相打ちは二百回でしょっ」

「あんた馬鹿? 相打ちは百九十八回、私の方が勝ち星は上よ」

剣呑な空気を帯び、二人は至近距離から睨み合っていたかと思うと——ドゴツツ、と。

同時に放たれた拳が、お互いの頬にめり込んだ。

「決着をつけてやる!!」

「ちよ、二人とも——!?!」

アイス達が駆け付けてくるまで、激しい姉妹喧嘩は続くのだった。

## 男の矜持

ドガンツ!! と。

凄まじい殴打音が鳴り響いた。

闇に満ちる夜半、人気のない街外れの貸し出し倉庫の一つから光が漏れている。木箱を乱雑に押しつけて作られた広い空間にいるのはベートだった。冷たい石の地面に転がり、切った口から流血しながら、彼は忌々しそくに「クソツタレが」と天井を見上げている。

「馬鹿力のドワーフめ……」

「付き合わせておいて何という言い草じゃ」

仰向けの姿勢からベートが上体を起こすと、前にはドワーフのガレスが立っていた。互いにインナー一枚を着て、引き締まった、あるいは岩のような筋肉の肩を剥き出しにしている。防具を纏わず身軽な格好をする彼等は、片や汗と傷まみれ、片や無傷のままと対照的だった。

「下っ端どもだけではなく幹部連中も少女に触発されおつて……気性の荒い者ばかりで困る」

アイズがLv. 6 に到達したことで、今や【ロキ・ファミリア】の士気はとどまることを知らなかった。ティオナやティオネ、レフィーヤ達下部構成員が己を高めようと張り切る中、ベートもまたガレスを強引に呼び出し、こうして鍛練に付き合わせている。

己より格上のドワーフの戦士に、彼は何度も飛びかかつてはねじ伏せられていた。

「こんな所に呼び出さずともホームでも良からう。言えは組み手くらい付き合つてやるわい」

「雑魚どもの前でくだらねえ姿なんぞ晒せるか」

鍛練に明け暮れる姿、ひいては打ちのめされる姿を団員達には見せられない。ベートの言外の意味と、その高い自尊心に、ガレスは嘆息する。

「アイズと言い、赤髪の化物といい……女どもに負けていい筈がねえだろう。このままでいいわけがねえだろう」

俺は男だぞ、と。

自分本位かつ、乱暴で、他者を顧みない——けれど誰よりも男の矜持に燃え狂う鋭い琥珀色の瞳に、ガレスは目を細め、くつと歯を剥いて笑った。

「最近暴れ足りないで鬱憤が溜まってんだろ、クソジジイ。おら、さつさと来い」

「ふんっ、生意気なクソガキめ」

年長者の表情を消し、ガレスは戦士の顔付きになる。握った両手から音を鳴らし、好戦的な笑みが口に宿った。

狼の遠吠えが上がり激しい戦闘が再開される。汗の粒を散らしながら狼人は何度も挑みかかり、ドワーフもまた何度でも応え、貪欲に強さを求めた。

満月に見下ろされる倉庫から、拳を交わし合う音が途切れることはなかった。

## 密会の行方

【ロキ・ファミリア】ホーム、執務室。書類の山を捌く団長のフィン、そして副団長のリヴェリアは、事務仕事の片手間に会話を交わしていた。

「アイズのせいで、すっかり【ファミリア】全体に火がついてしまっているようだ」  
 「士気が上がるのは喜ばしい、とは確かに言ったけどね……」

嘆息を漏らすリヴェリアに、フィンが苦笑した。アイズの階層主撃破——昇<sup>ラシクアップ</sup>華するに相応しい偉業を成し遂げた【劍姫】に誰もが刺激されてしまい、『遠征』前にもかかわらず、テイオナやテイオネを筆頭に多くの団員が鍛練に励んでいるのだ。

「まあ、テイオナ達の気持ちもわかるよ……許されるなら、僕も体を存分に動かしたい」

湯気上げるカップを取り、口につけるフィン。アイズに触発された周囲と同じように鍛練に打ち込みたいと匂わせる小人族の団長は、意味ありげにリヴェリアへ流し目を送った。

「リヴェリア、どうだい？ 久々に模擬戦でも」

「……魔導士の私と、か？ ガレスとやればいいだろう」

「ガレスにはベートの先約があるらしい。さつき、断られてしまったよ」

ベートも熱を持てあましているみたいだ、と肩<sup>かた</sup>を竦<sup>すく</sup>めてみせる彼に、書類に目を通して

たりヴェリアは吐息をつく。……そして、すぐに瞑目<sup>めいもく</sup>し、フツと笑った。

「今夜ならば空いている」

「わかった、それじゃあ部屋のドアを開けといてくれ。夜、訪ねに行くよ」

結局自分達も鍛練に勤しみたいフィン達は、二人で小さく笑い合った。

『今夜ならば空いて——』「わかった、それじゃあ部屋のドアを——夜、訪ねに——」

執務室の扉の奥から聞こえてきた会話に、ちょうど報告書を提出しに来ていたレフィーヤ達下部構成員は、真っ赤にした顔でそれぞれを見交わす。

「だ、団長とリヴェリア様が……!?」確かに二人ともよく一緒にいるし……!」「やっぱりあの相思相愛は本当に……!」「ちよつとリーネ、声が大きい!?」

輪になった種族が異なる少女達の間で憶測の数々が飛んだ。そして、衝撃と興奮に撃ち抜かれるレフィーヤ達は、その存在を知覚するのが遅れてしまう。

「……………今の、どういうこと?」

「——ひつつ!?」 テイ、テイオネさん!?」

いつからなのか、目から一切の光を消したテイオネが立っていた。戦慄<sup>せんりつ</sup>する少女達の中、悲鳴を上げたレフィーヤが何かの間違いだと言って聞かせるが、今の彼女には何も届かない。その夜、鍛練という名の密会をするフィン達のもとに、一人の襲撃者が乱入するのだった。

## My Memory

「……んー？」

体を揺らす振動に、ティオナは瞼を開けた。

視界に映る石造りの暗い天上。同じく石の壁に設けられた鉄格子てつこうしの小さな窓——等間隔に並べられた複数の明り取りから、細い日差しが差し込んでいる。血痕けつえんに似た染みが至るところに存在し、薄汚れ、空気も淀んだこの場所は、いかにも不衛生そうな大部屋であった。

錆びた鉄の臭いと石のみしかない部屋ぶつの中心で一人、ティオナは大の字で転がっていた。

周囲には本が散乱している。まるでつい先程まで沢山の物語を読み耽ひたっていたかのように。身を起こし、頁ぺいが開かれた本の一つを手にとると……それは子供向けの童話だった。

牛頭人体の怪物に立ち向かう、英雄の絵本に首を傾かしげていると、一段と大きな振動と叫び声——歓声が轟いた。

「なにちんたらしてんのよ。次、あんたの番よ」

びりびりと震える部屋の奥から現れたのは、黒い長髪を揺らす、幼い姉の姿だった。

「……ティオネ、なんで小さくなってるの？」

「はあ？ 寝惚ねぼけてんじやないわよ、愚図ぐず」

まるで幼少の頃に戻ったかのように言葉づかいが汚くなっているティオネは「汚いわね」と乱暴に本を蹴り飛ばす。あの豊満な胸むねの膨らみが欠片かけらもない小さな体、荒んだ瞳ひとみ。そして外から伝わってくる女傑達の声々を聞いて、ティオナは唐突に理解した。

ああ、そうか、ここは——闘技場だ。

ティオナとティオネは、この戦いの場に物心ものこころつく前から放り込まれているのだ。

そうだった、そうだった……そうだった？ と再び首を傾げながら、ティオナは部屋の隅で干し肉を食い千切り出している姉に声をかける。

「ティオネ、今日なにと戦ったの？」

「糞豚オノクダと糞犬ケツイヌどもよ。糞尿オノクダの臭い垂れ流しやがって……最悪」

言いながらも食を進める姉は、こちらの相手をするのも億劫えいけつそうに、通路の奥を顎あごで示す。

「さっさと行きなさいよ。今日勝つたら、糞女神オノクダが褒美ほうびをくれてやるって言ってたわよ」

「本当!？」

その言葉に、ティオナは勢いよく食いついた。顔を輝かせその場からはね起き、控え室から飛び出す。通路の奥から届いてくる凶暴な怪物モンスターの雄叫おたけびに恐れることなく走り続けた。

今度は何の物語を、何の童話を、何の英雄譚モンスターをもらおう？

頭の中の関心を勝利の景品だけで埋めつくすティオナは、光が見える出口を目指す。戦場せんじやうに続く、扉のないアーチをくぐって、光と歓声が待つその先へ——。

「……やっぱり、夢か」

そこで、ティオナは目を覚ました。

朝を告げる小鳥の囀りが聞こえてくる中、大の字に寝転がった体勢から上体を起こす。毛布を床に蹴り飛ばした寝台の上には、童話や英雄譚の本は存在しない。幼い頃、夢中でかき集めていた沢山の物語のことを思い出しながら、ふああ、とティオナはあくびをした。



「ティオナ、あんた借金どうするつもり！」

ホームの大食堂で朝食を済ませた矢先、姉は開口一番そう言うってきた。

「大双刃の未払い金、まだいくら残ってるのよ!？」

「んー……あと九〇〇〇〇〇〇ヴァリスくらい？」

「馬鹿っ!!」

アイズ達が24階層に帰ってきた翌朝。謎の勢力と接触した情報は幹部のみに知らされ一時は騒がしくなったものの、一夜明けた現在では落ち着きを取り戻している。レフィーヤは精神疲弊の反動で寝込んでいるものの、ベートは既にびんびんしているし、アイズも健在だ。

事件のあらましを彼女達に尋ねつつも、ティオナ達は普段通りの日常を過ごしていた。

そんな中、ギャーギャーやかましく説教してくるティオネを、ティオナはじーと見つめる。

「……って、何よ、神妙な顔してこっち見て」

「べっつにー」

今朝見た過去の記憶からすっかかり変わった姉に対し、ティオナは何でもない風に装った。

「とにかく、そう簡単にぼんぼん借金作ってもらっちゃあ堪んないのよ! あんたの汚名なんてどうでもいいけど、団長の派閥に変な評判がついて回るでしょう!」

「いーじゃん、冒険者なんだからさあ。ねえー、アイズー?」

「うん、と……」

ティオネの怒声を右から左に流し、ティオナは隣にいるアイズに同意を求める。

ちなみに、金髪金眼の少女の今の格好はメイド服だった。24階層の単独先行を冒した『罰ゲーム』としてロキに命じられたのだ。この後、アイズはセクハラを躲しながら一日中主神に奉仕せねばならない。他団員の興味津津々の視線を周囲から浴びる中、フリルとレースをふんだんにあしらった服を今も恥じらっているのか、アイズは歯切れの悪い声を出す。

「アイズ達さ、24階層で『宝石樹』を見つけたんでしよう!? その場所教えてよ、あたし取ってくるから!」

実っている宝石の数にもよるが、稀少な宝石樹の採取は一攫千金の好機だ。宝財の

トレジャー・キパー グリンドラゴン

番 人の木竜から『ドロップアイテム』が発生すれば三〇〇〇万ヴァリスにも届くかもしれない。財宝を守る凶暴な竜も、テイオナの前では強敵の内に数えられない対象である。簡単、とまではいかなくとも時間さええければ一億ヴァリスの借金は何とか返済できる。それが第一級冒険者という存在であり、都市最大派閥という組織だった。

全く反省の色を見せない妹の姿に、「こんの愚妹っ……!!」とテイオナは怒りに震える。

「ほら、アイズ、どこどこー?」

「えっと、確か、正規ルート沿いの……」

「——駄目よ、アイズ!」

ばんっ! とテイオネの右手が食卓を叩いてアイズの言葉を遮る。

「そんな風に戻す返せるなんて思ってるからボンボン武器を壊して借金こしらえてくるのよ!! 考え方からして馬鹿で愚かで【ファミリア】泣かせよ!」

ぎくり、とアイズが肩を揺らした。

「だからあ、冒険者なんだからさあ!」

「黙んなさい! お金を稼ぐのがどれだけ大変か、あんたは今日一日学んできなさい! それでちよつとは反省しろ、脳みそ筋肉!」

「えー!? ていいうか何その名前!?!」

強引な命令に異議を唱えるが、実の姉は頑として譲らなかつた。寶石樹がもつたいない、

借金を残しておく方が問題、と話題をすり替えても「自分が行く」の一言で切り捨てられる。

アイズがおろおろする前で、テイオナは無理矢理姉からの課題をこなすこととなった。

「じゃあ、この荷物を交易所で売り払ってきなさい。全部売るまで帰ってきちゃ駄目よ。手に入ったお金は、あんなものにしていいから」

膨れ上がった荷物を押し付けられ、ニコニコと笑うテイオネとメイド服姿のアイズに玄関先から見送られる。テイオナはうらめしそうに背後を見て、ホーム正門から出発した。

「もう、勝手に決めてさあ。しかもこれ、ほとんどガラクタだし!」

バックパックの中身——ホーム中からかき集められた品々は、中途半端に使い込まれた中古の剣に盾、種族ばらばらの女性用の衣類、胡散臭い書物など、有り体に言ってしまうと置き場所に困るものばかりだった。恐らくは各団員の不用品や倉庫の片付けをして出てきたものばかりだろう。テイオナは廃品の処理を任されてしまったのだ。

「フィンに褒められたいの、丸わかりだよ……」

実姉のご満悦顔を思い浮かべながら溜息をつく。バックパックを背負い直すテイオナは、照りつける太陽に見下ろされながら、不承不承に足を進めた。

目的地に指定された『交易所』は都市の南西部、西のメインストリートと南西のメインストリートに挟まれた第六区画に存在する。海路の出入り口である市壁外の汽水湖——ログ湖



服……そういうえば最近胸元苦しそうだったな……本当に大きくなって、ぐぬぬっ……と。

手に取られていく同僚達の古着を眺めなら、品物とヴァリス金貨を交換していく。なんだ、簡単に売れるじゃんつ——と、そう思っていたのも最初だけだった。

間もなく客足は途切れ、ティオナはすっかり暇を持てあますようになる。

時折、冒険者らしき者達が足を止めていくのだが、

「おいっ、見ろよモルド！ 上等もんのプロードソードだ、掘り出しもんだぜ！」

「ほほう、こんな蚤の市にも足を運んでみるもんだぜ——って、げええっ!? 【大切断】!?」

と大体似たような反応を残して一目散に立ち去っていった。自分の顔を見ては全力逃走する彼等に、「なにさっ、もーっ」とティオナは盛大に口を尖らせ、不満気な表情をする。

敷かれた外袋の上、そして背後のバックパックにはまだ沢山の品が残っていた。

「場所が悪いのかな……それとも、あたしも呼び込みしてみる？ このピカピカの戦闘衣なんか売れそうなんだけどなー」

露店を開いている場所は自由市の中でも隅の隅、建物の陰だ。人通りの良いところは他の露店商に埋めつくされていたのである。盛んに売買を行う店主達をじっと観察し、大声での呼び込みや、並べる品物を変えてみたりするものの、成果は全く上がらなかった。

「はあ、駄目だあー。やっぱりあたしには無理だよー」

人目とはばからずその場に大の字に転がる。商才なんて自分にあるわけない、としばらく自暴自棄になっていたが、実姉の『ほら言ったじゃない』『お金を稼ぐって難しいのよ』『これにこりたら私の言うことを聞くことね?』とニヤニヤする顔が頭の中で浮かび上がり、ぐっと瞳が吊り上がる。負けるもんかーっ、と気炎を吐いてババツと身を起こした。

場所を変えよう、とバックパックに品物を全て詰め込んで、ティオナは移動を開始した。

「自由市の方でも、色んなもの売ってるんだ」

空いている空間を油断なく探す傍ら、売られている品物の類には驚きと発見がある。自家製と思われる果物瓶に趣味の絵画、工芸品。迷宮の『ドロップアイテム』と称して獣の牙や爪を売る詐欺師には呆れてしまうが……自由市の名の通り、誰にでも参加できて何でも商品として並べることができるらしい。共通していることは相場より値段が低価格であるということだ。

噴水が設けられた広場を掠めながら、物珍しげに顔を振っていると……ぴたり、と。

ティオナはある店の前で足を止めた。

「本……」

眼鏡をかけた穏和そうな青年が並べているのは、いくつもの分厚い書物だった。

難しそうな哲学書から挿絵がついた薬学書まで、色とりどりの装本。狭い台座の上に平積み、あるいは背表紙を縦にしてぎっしり陳列されている光景はティオナの意識を引っ張る。

不意に蘇るのは今朝方見た夢だった。幼少の頃かき集めた、思い出の物語の数々。

〔あつ、英雄譚……〕

小型の画架を利用して置かれている革張りの本、紋章が刻まれた表紙に視線が吸い込まれる。見覚えのある金字の題名——『理想郷譚』——を見て、ティオナの体は自然に動いていた。

露店の前に歩み出て、その英雄譚に手を伸ばした——次の瞬間。

横から伸びてきたもう一方の手と、見事にぶつかった。

「えっ?」

こぼれ出た言葉も重ね合わせながら、驚くティオナは真横を見る。

次いで、更にぎよつとした。

隣にいたのは、黒鉄の大兜を被った、奇妙な格好の人物だったのだ。

ティオナと同じく英雄譚を手に取りうとした謎の人物は、慌ててその場から立ち上がる。

「すつ、すいません!? 僕っ、お金ないので……ど、どうぞ!」

「あ……ああ、うん」

少し高い少年の声で、彼は本の購入権を譲ろうとする。単に手が伸びてしまい買おうとまでは思っていなかったティオナは、面食らっていたのも手伝って、ぎこちない声をこぼした。

自らも立ち上がり、目の前の人物をあらためて観察する。身長はティオナと同じくらい、その身のこなしからして、きつと冒険者だ。まるで『闇の騎士』という言葉を行彿させる真つ黒

な兜は頭全体を覆い、口もと以外肌が覗いていない。髪も、瞳も、全て隠れてしまっている。

まじまじと見つめた後、ティオナは思わず疑問を口にしてしまふ。

「兜だけ被って、熱くないの?」

冒険者の中には『武具は体の一部だ!!』という熱い主義を掲げ、日常生活から鎧を纏う者も少なくないが……それにしても目の前の少年は中途半端だった。身に纏っているのは兜のみで、首から下はただの服なのだ。不調和過ぎる。

上空から照りつける太陽がじりじりという熱光線を放ってくる中、少年は、うぐつと言葉に詰まった後……恥ずかしそうに呟いた。

「その、取れなくなっちゃって……」

「……はっ?」



「じゃあ、商品を試しに被ったら、脱げなくなっちゃったってこと?」

「は、はい……」

露店の前から広場に移ったティオナは、少年から事情を聞いていた。

何でもとある露店の前でこの兜を発見し、興味を引かれて装着してみたら、外せなくなつて



「あたしのやること、手伝つてよ。今日中にこれ全部、売らないといけないんだ」  
背に担いでいるバックバックを担ぎ直しながら、交換条件を突き付ける。  
品物を売り切らないと困るというのは本当だ。だがそれは建前で、ティオナはこの変わった少年と別れるのが惜しいと思っていた。

自分のことをエルフと勘違いしているなんて笑えてくるし、本音を言えば少し浮かれもする。自分に対して逃げ出さない見ず知らずの冒険者というのも、ティオナにとって新鮮だった。何より——英雄譚を切っかけにした出会いが、ティオナに幼心を思い出させるくらいには、舞い上がらせていた。

「どう？ と下から顔を覗き込んで尋ねると、驚いていた少年は、すぐに顔を縦に振った。  
「わかりました、僕なんかで良かったら、手伝います」  
「決まりだね！ よろしくっ！」

ティオナは少年の手を両手で掴み、ぶんぶんぶんつ、と相手の体ごと上下に揺らした。

少年とティオナはまず、露店を敷く陣地を探しに、自由市を歩き回ることにした。

「じゃあ、君も英雄譚が好きなんだ？」

「はい、祖父そだてのおやによく読んでもらって……さつき売られていた本も、懐かしくなっちゃって」  
つい手を伸ばしてしまった、と唇をはにかんだ形にしていた少年は、そこで気が付いた

ように「あの……」と尋ねてきた。

「ん？」

「名前、教えてもらっても大丈夫ですか？ なんて呼べばいいか……」

うーん、とティオナは悩んだ。嫌というわけではないが、今に限っては第一級冒険者の名は伏せていたい。この妙に面白い関係をもっと続けていたい……そう思うティオナは、

「エルナ、だよ」

少年に向かって、そんな名前を名乗った。

「……それって、もしかして、さつきの本に出てる……？」

「あははっ、わかる？」

『エルナ』は先程売られていた書物、『理想郷譚』に出てくる登場人物の一人だ。

英雄譚好きとあってしつかり見抜いてくる少年に、「さすが！」とティオナは誉めそやす。

苦笑を浮かべる彼は、ティオナの意向を汲んだのか、彼女の悪戯に乗った。

「じゃあ……エルナさんはどうして、英雄譚が好きなんですか？」

「……あたし、今考えてみると結構物騒なところにいるさ。娯楽って呼べるものがなかったんだと思う。そんな時、捨てられてた本をたまたま拾って、読んで、のめり込んじゃって……」  
誰もいなくなった闘技場に落ちていた本とも呼べない紙屑の塊。怪物や同族を倒す日々の中で拾った物語の欠片と、闘争とはまた別種の興奮を、ティオナは今でも思い出すことがで

きる。

回想に耽つていたティオナは、少年が口を嚙くはんでいることに気付き、場の空気を吹き飛ばすように話題を変えた。

「どういえはさ！ あたしがエルフに見えるって言うけど、どんな感じ？」

「あ、えつと……そうですね、髪は金色で、長くて、瞳の色は……」

少年の言う情報に、ふんふん、とティオナは相槌を打つ。

どうやら着ている服装や声音も変わっているようで、少年にはティオナが完璧ていじきなエルフに見えているらしい。外衣ケイブにワンピース、声は心地の良いソプラノだそうだ。

レフリーヤみたいな感じかな——そうティオナは思い浮かべ、ふふつと微笑を漏らした。

ややあつて空間スペースを見つけ、露店の準備をする間も、ティオナ達は会話を続けた。何でも少年は契約契約していた仲間仲間がいなくなつてしまつたらしく、思い当たる場所を全て訪れた後、知人の女性に気分転換も兼ねてこの自由市フリーマーケットに連れてこられたそうだ。そして例の兜を被つてしまい、その知人の姿も見失い、途方に暮れていたらしい。

仲間仲間が見つからなくて不安ではないのか、と尋ねると、勿論もちろんある、と少年は正直に答えた。でも、またすぐに会えるような気がしている、と彼はどこか朗らかに笑つた。

仲間への信頼と想いを窺うかがわせるその姿を見て、ティオナもまた、釣られて微笑み返した。そして、話を交わしながら露店を開くと半刻。

「……ねっ、全然ぜんぜん売れないでしょ!？」

「う〜ん……」

粘つたが全く売れない有り様を、ティオナは少年に訴えた。

二人で客寄せをしても効果は薄く、迷宮界隈迷宮界隈の者達はティオナを見て逃げる。

ここまでくると品の良し悪しではなく、客に自分達を見つけてもらえないかどうかという気もしてくるが……日当たりの悪い通路に構えた己の露店を見て、ティオナは唖あつて考える。

「……あの、それじゃあ、僕達の方から売りにいってみませんか？」

「えっ?」

「『魔石』なんかの換金換金みたい……他の露店の人に、買い取ってもらうんです」

自由市では、他者から買った品を自分の店で高く売る、という光景が往々にして見られる。品を買い取ってもらつた側からすれば気分がいいものではないが、それは品の価値を見抜けなかつたという側面もある。確かな目利きができる者達は、この方法で意外にも冒険者以上の収入を上げることができるらしい。『自由市は宝の山』、彼等はそんなことをよく口にする。

「それって、商談しょうだんってことだよな? ちょっと怖いけど、む〜んっ」

少年の提案は商人や商業系派閥ファミリーに迷宮の戦利品を買い取ってもらう商談と同義だ。一般人の露店が多い分、難易度ハードは下がっていると思うが……団員達のように、上手い交渉術が自分ができるだろうか。どうせなら高く買い取ってもらうって、あの姉テリオナをぎゃふんとも言わせたい。

自信なく提案した少年の前で、散々悩んだティオナは、ばつと顔を上げた。  
「うんっ、やってみよう！ このままじゃ埒があかないし！」

待つのではなく、こっちらから攻める。冒険者としての自分なら迷わず選択する。

再び品物を詰め直し、ティオナは少年を引き連れて一発勝負に出た。周囲に広がる数ある露店の中でも、木で作られた小型の屋台——「一番お金を持ってそうな店——」に突撃するが、

「全部びみよー。合計一〇〇〇ヴァリスでなら買い取ってあげる」

「えっ!? 少ない!?」

ティオナと同じ、アマゾネスの少女の店主は、二十点以上の品々に対してそう告げた。これならば、ティオナ自身がいい加減に売っていた方が遥かに儲かる計算である。

「ねえ、いーじゃーん!? もっと高く買ってよ、同族のよしみでさあー！」

「だめだめ、ルルだつて生活がかかっているんだもん」

「でも、ほら、この戦闘衣なんて全然使っていないよ!? ピカピカじゃん！」

「古い本に、ちよつとマシな冒険者の戦闘衣、お金なんて出せませーん」

己をルルと呼ぶ店主は碌に取り合わない。足もとを見られている、とティオナは直感した。女戦士にしては幼い相貌に、甘ったるい声、何より——豊満な体付き。

身長こそ同等だが、実る巨峰はあの姉すら凌ぎ、無説論ティオナなど比べるまでもない。

ぐぬぬぬっ、とあらゆる意味でティオナの負けん気に拍車がかかるが……駆け引きの材料もないこちらの方が圧倒的に振りだ。悔しいいゝ、とティオナは顔を真っ赤にしてしまう。

「あの……それじゃあ、この武器も付けるっていうのは、どうですか？」

と、二人のやり取りに圧倒されていた少年が、横からおずおずと切り出した。

「こ、これは……」

店主が初めて目の色を変える。ティオナはティオナで「あ、忘れてた」と少年に持つてもらっていた都市最大派閥の装備品について呟きを漏らす。

鋭い光を放つブロードソード、欠けた跡のある盾。寸法が合わなくなったなど蔵入りの理由は様々だが、『遠征』には持つていけないというだけでまだ十分に使える上等の武器だ。価値はまだすこぶる残っている——それが店主の反応からわかる。

「この装備品と全部合わせて……もう少し、その、高く買い取ってもらえたら……」

これは後で聞いたことだが、少年はつい最近高額の精神力回復薬と合わせて回復薬を二つ購入したらしい。その経験から、価値の高い品に低い品を付属させることで買い取ってもらう、という方法を考えたとのことだ。

少年の要求を聞き、ぐっ、と店主が揺れるのをティオナは見逃さなかった。本来なら真つ当な武器屋で買い取ってもらってもおかしくない上級冒険者の中古品である、是が非でも手に入れているのだらう。

「ふ、ふーん……まあ、それだったら三〇〇〇〇くらいは——」  
 「三十万!!」  
 吹っかけた。

『カドモスの皮膜』を売った姉を真似るがごとく、ティオナは十倍の売値を叩きつける。店主がくわっと目を見開き、少年も兜の下でぎよっとしたのがわかった。

「そ、そんな大金積めるわけ……!!」

「出してくれないなら、他のところ行っちゃうもんねー!」

今度は店主が「ぐぬぬぬ」と震える番だった。ティオナは逆にしてやったりと笑む。やり取りにうろたえる少年を他所に、互いに睨み合うアマゾネスの少女達。

「………いいよ、ルル、三十万出してあげる」

長い睨み合いを経て、店主の方が折れた。屋台の卓の上に金貨が詰まった袋を置く。

しかし、彼女の顔には不敵な笑みがあった。

怪訝そうな目をするティオナの前で、「ただし!」と言って勢いよく立ち上がる。

「ルルも貴方達に買物させるよ! お代は……ルルの買値の割引権!!」

「……なに言ってるの? そんな買物、するわけないじゃん!」

三十万の買値を減額させる。つまりはそうのたまう相手に、ティオナが反論すると「ふふん」と店主は勝ちを確信している笑みを見せる。彼女はててと屋台を回り、ティオナの正

面に現れ——通り過ぎると、兜の少年の手を取って、ぎゅっと抱きしめた。

「はあ!」

「いいっ!?」

「ねえ僕う、ルルの買い取りのお金、減らして?」

ティオナ、そして少年の叫び声が響く中、店主は頬を染めて、一層甘ったるい声を出した。

しなを作り、上目遣い。これでもかと胸の谷間を見せつけ、体も密着させ、色香まで振りまき——少年を悩殺しにかかる。

「お代を払ってくれたら……ルルの体、いくつばいい好きにしていいいよ?」

——この・女!!

ティオナは大噴火しそうになった。色仕掛けである、女豹である、外道である!

店主は己の一番の武器をわかっている。その体という凶器で少年を『魅了』するつもりだ、言質を取って体を僅かでも触れさせたら、「交渉成立!」と宣言し買値を値切るつもりだ!

何たる悪魔の所業! ド貧相なティオナをすっかり侮辱してくるオマケ付き!!

怒りと敗北感、そして心を許していた少年が他の女に屈するという絶望感。それらがティオナの行動を致命的に遅らせ、制止の言葉を間に合わせない中。

少年は、震える唇を開いた。

「け……結構です……や、止めておきます」



「主、神様からお暇をもらつて、息抜きに自由市へ……」と話すアミッドに、テイオナは「ちよつと良かった！」と事情を説明する。

置いていかれていた少年が遅れてやって来る中、アミッドは「なるほど」と頷いた。

「事情はわかりました。では一度、私達の店へ向いましょう。そこで治療を——」

「——うちの顧客に何してるの、アミッド」

と、そこでアミッドの言葉を遮る、険のこもった声が響く。

テイオナ達が振り返ると、そこには大きな紙袋を抱えた犬人の少女がいた。

「……ナアーザ・エリスイス」

「色々なものを私達から奪つておきながら、まだ足りないの？ その客は渡せないよ……」何か調査にでも使うのか、沢山の葉草や果実を紙袋の中から覗かせる非好意的な相手に、硬い声を出すアミッド。

そんな彼女が呼んだ名に、「ナ、ナアーザさん？」と少年が反応した。

「僕のことつ、わかるんですか？ というか、ナアーザさんもエルフだったんですね……」

「ん、匂いでわかるよ……なに言ってるのかはわからないけど」

二人の会話を聞いて、テイオナはぴんと来た。気分転換がてら少年をこの自由市に連れてきた知人の女性というのが、彼女のことなのだろう。兜で顔を隠している少年に対し、犬人の少女はすんすんと鼻を鳴らす。

そして彼女もまた事情を聞くと、少年の手を引つ張つて、テイオナ達に背を向けた。

「行こう。商売敵の連中に世話になる必要ない、呪詛なら私の薬でも解ける……高いけど」

「ちよつと!? ナ、ナアーザさん!?」

「……!!」

テイオナは連れて行かれてしまふ少年に対し、片腕を上げかけ……下げた。慌ててこちらに振り返り、頭を下げる彼は、雑踏の奥に消えていく。

その場には、立ちつくすテイオナとアミッドだけが取り残された。

「……アミッド。あの犬人の人とは、知り合いなの？」

「色々な、因縁がありまして……憎まれているとは思います」

珍しく複雑そうな目付きをしていたアミッドは、ややあつて溜息をつく。あまり喋りたくない空気を言動の端々から感じ取り、テイオナはそれ以上言及しようとはしなかった。

「……あ」

「テイオナさん？」

名残惜しい気持ちと、でもまあしょうがないのかなという達観した気持ち、二つの感情を混ぜ合わせ苦笑していたテイオナは、そこではたと動きを止めた。アミッドの横で、呟く。

「名前、聞くの忘れてた……」

固まっていたテイオナは、アミッドに見守られながら、やがてうつすらと微笑んだ。

愉快な一時を過ごし、お互いの名前も知らないまま、お別れする……どこか物語じみた少年との時間に、にしっ、と笑みが溢れてくる。宝物が一つ、増えた気分だった。またどこかですれ違うのかもしれない、そう思いながら歩き出す。「アミッド、買い物ちよつと付き合つてよ」と声をかけ、少年と歩いた道をなぞり始めた。

「何を買われるんですか？」

アミッドの問いかけに、頬を染めて、笑みを咲かす。

「思いついた物語、買っていいこうと思うんだ」

幼い頃の自分を取り戻しながら、ティオナは一冊の英雄譚ほへんを手に入れた。

聖女にもわからないことがある

「あの、アミッド……いいかな?」

己を訪ねてきた少女に、「**【アイズ デイアン ケヒト・ファミリア】**の治療師、アミッドは首を傾げた。日はとうに暮れた時間帯。派閥の治療院の店じまいに取りかかろうとしていたアミッドは、懇意にしている第一級冒険者の訪問を不思議に思いつつ、別室に通し、二人きりとなる。

派閥の『遠征』が数日後に迫っている筈のアイズは、こんな時間に訪れた目的を明かす。

「冒険者の、怪我が手当ての仕方……教えてくれない、かな?」

「応急処置ということですか? 売り込みとは違いますが、回復薬ではいけないのですか?」

「うんと、回復薬はあまり使わせたくなくて……」

訓練だからこによごとと言う少女に、事情を何となく察したアミッドは笑って了承した。

身の丈は一五〇Cにも届かず小柄だが、アミッドの歳はこれでも十九である。有能な治療師として派閥の迷宮探索にも度々随伴し、能力はL.V. 2。複数派閥連合による階層主討伐、その中で瓦解した戦線を身の危険も顧みず、類い稀なる治療魔法でたった一人支え続けた偉業を評価され、神々からは「**【戦場の聖女】**」の二つ名を賜っている。

治療師として、年長者として自分を頼りに来てくれたことは、素直に嬉しいことだ。

「あの、アミッド、それと、えつと……」

「どうぞ。聞きたいことがあるのでしたら、おっしゃってください」

二つ名の通り聖女のように優しく微笑みかけると、アイズは意を決して顔を上げる。

「正しい膝枕のやり方、教えてくれない?」

「えつ」と、脈絡のないぶつとんだ質問にアミッドは固まる。膝枕など親等にされたことはあるが、一角獣くらいにしかしたことはない。何をもって正しいと言うのかもわからない。

顔をほんのり赤らめる相手と同様、頬を染めるアミッドは謝って断ろうとしたが——治療師として、年長者として自分へ期待の眼差しを送ってくるアイズに、「うつ」と言葉に詰まる。

汗を流し視線を左右に振っていたアミッドは、ややあつて、頷いてしまった。

「わ、わかりました……お教えしましょう。お、お手本を見せますので……アイズさん、どうか私の脚の上に……」

「主、神様。先程部屋を訪ねたら、俺達のアミッドが**【剣姫】**に膝枕していたんですが」

「何を言っているのかよくわからんが、何故お前は鼻血を流しているのだ?」

団員の言葉に老神が聞き返すと、彼はイイ表情で「とてもいいものでした……」と眩く。

後日、誇張された噂が回り、聞きつけた男神達が「百合の花園はここかー!?」とわけのわからないことを叫び治療院に押しかけるようになるのだが、それは別の話である。

## Who is your rival?

「リヴェリア様、この詠唱式について教えて頂けませんか？」

「あ、ああ……」

「魔法」の分厚い専門書を手に迫ってくるレフィーヤに、リヴェリアはぎこちなく頷いた。

深夜の【ロキ・ファミリア】のホーム。数日後に迫った『遠征』の計画表を羊皮紙に綴っていたリヴェリアの自室をレフィーヤが訪れてきたのは先程のことである。

窓の外はすつかり暗くなり室内の魔石灯の光が揺らめく中、目が据わっている同族の少女にリヴェリアは確かに気圧されてしまっていた。

今日だけではない。少女は連日中はどこかへ出かけ、夜はこうしてリヴェリアのもとを訪ねて教授を仰いでくる。ここ数日のレフィーヤの学ぶ姿勢、鍛練の意志には目を見張るものがあり——というより鬼気迫るものがある。

「レフィーヤ……寝ているのか？」

「一時間は寝ています」

「馬鹿者っ」

遠征前だぞつ、と声を上げる。昇華している能力<sup>ステイクス</sup>によって常人より身も心も遥かに強靱<sup>タフ</sup>

あり、体力もあるが、それでも限度がある。遠征前に疲労を残すなどリヴェリアは口酸っぱく告げた。当の本人は教えた箇所<sup>かしよ</sup>の専門書を凝視して聞いちゃいなかったが。

(だが……いい傾向ではあるか)

目の前で立ったまま学修に耽<sup>た</sup>る姿には頭が痛くなるものの、リヴェリアは胸の内<sup>むね</sup>で笑みを浮かべる思いだった。アイズ達に追いつきたいという強い意志は今まであった、だがこのような『負けたくない』という気概、がむしゃらさは以前までのレフィーヤにはなかったものだ。

よほどいい競争相手が見つかったのだろう、とリヴェリアは目を瞑<sup>つむ</sup>り微笑する。

やがて理解することができたのか、「ありがとうございます」と頭を下げ部屋を後にしようとするレフィーヤだったが——その去り際、ぴたりと立ち止まって、尋ねてきた。

「リヴェリア様。つかぬことをお聞きしますが……昔、兎は呪術<sup>うまじゆ</sup>——魔術儀式の生贄<sup>いけにえ</sup>にされていたんですよね？」

「ああ。魔女と名乗る魔術師<sup>メイジ</sup>達が薬や魔道具<sup>マジックアイテム</sup>の原料にしていた。それがどうかしたのか？」  
訪ね返すと、神妙<sup>しんまう</sup>な顔で黙っていたレフィーヤは、顔を上げた。

「兎本人<sup>うま</sup>を呪<sup>のろ</sup>う道具に、心当たりはありますか？」

「お前は<sup>なに</sup>何と戦っているんだ」

今まで以上に鬼気迫る表情で問うてくる同族の少女に対し、この娘<sup>むすめ</sup>のことがわからない、とリヴェリアはこの時初めて思った。

## 大乱闘スマッシュユアドベンチャーズ

## 20階層。

「うりゃああああああああああ——っ!!」

## 25階層。

「がるああああああああああ——っ!!」

## 30階層。

「このおおおおおおおおおおおおおとおおとおおっ!!」

「うおおおおおおおとおおとおおとおおとおおっ!!」

## 40階層。

「邪魔だあああああああああああああああああああああつ!!」

ボコボコにされた異形達が倒れ伏すダンジョン深層域。大双刃と銀靴を振るい回し二人で怪物を屠りまくっていたティオナとベートは、獲物を奪っては攻撃の邪魔をする相手に怒鳴り散らした。

『遠征』に突入して既に四日目。『上層』にてとある少年の冒険に当てられた彼女達は、持てあます熱に促されるまま遭遇するモンスター達を片っ端から殲滅していた。出番を奪われる

第二級以下の団員達はその迫力と形相に気圧され汗を流すばかりである。居ても立ってもいらなくなっている第一級冒険者達は、『遠征』など関係ないとばかりにひたすら戦い続けていた。

「あ、あのっ、ベートさんっ、ティオナさんっ?」

「なんだっ?!」なにっ?!」

「い、いやっ、あつちでティオナさんが一人モンスターを倒しまくってるっすけど……」

「あああ——————」

おびたげるラウルが示す先、ベートとティオナが争っている他方でティオナが悲鳴を上げるモンスターの大量に襲いかかっていた。少年の冒険を見て同じように血を滾らせている女戦士の姿に、ティオナ達はやらすかとばかりに戦場へ突貫した。

「……これでアイスが加わったら、どうなってしまうんじゃ」

「一応、負担と言えるものはティオナ達だけにとどまっているが……」

「ンー……頭が痛い」

前方で暴れまわるティオナ達、そして横でうずうずたずんでいるアイスが横目に頭を痛めるガレス、リヴェリア、フィン達首脳陣。彼等の口から嘆息が途切れることはない。

「はははっ、本当にお前達のところは愉快な『ファミリア』だな?」

「ううっ、反論できないっす……」

同行者達を率いながらケラケラ笑う椿の言葉に、ラウルは深く項垂れるのだった。

## 決戦前夜の攻防

「テイ、テイオネさんっ、本当に忍び込むんですか……!?」  
 「ちよつとだけ、ちよつとだけよ、団長の寝顔を拝んだらすぐ帰るから……!」

(絶対そのまま寝るつもりだ……!)

ダンジョン50階層、野营地。見張りの目をやり過ぎしながらこそと根拠地を徘徊するテイオネ、そして半ば強引に同伴させられているレフィーヤの姿がそこにはあった。

彼女達の目的地は小人族の団長が就寝している大型テント、本営である。

未到達領域への進攻前夜である。明日の深層攻略に血の滾りを抑えられなかったのか、テイオネは想い人の寝室侵入を断行してしまっていた。彼女と同じ天幕で寝る筈だったレフィーヤはどうしてこんなことに嘆く思いであった。

ふふっ、ふふふふふっ……!? と不気味に笑う本能従順な女戦士に、あの小さな団長を抱き枕代わりにする未来を予見しつつ、とうとう本営へ辿り着いてしまう。

「や、やっぱり止めましょうテイオネさん……!?」というレフィーヤの制止虚しく、テイオネは灯りが消されたテント内へがばつと侵入した。

「——で、何しに来たんだ、お前達は?」

「り、リヴェリアアツツ!?」リヴェリア様!」

しかし、彼女達を本営で待ち受けていたのは眠りこける愛らしい小人族ではなく、絶対零度の眼差しを向ける王族だった。

「そ、そんなっ、団長は……!?」

「親指が疼くと言って別の天幕に移った。全く、進攻の前夜だというのにお前達は……!」  
 「ううっ、私はそんなつもりは微塵も……!」

うろたえるテイオネと涙を流すレフィーヤに、次の瞬間リヴェリアの雷が落ちる。

団長おー!? という叫びが響く中、少女達は可及的速やかに天幕へ追い返され、強制的に寝かされるのだった。

「で、本当に手前達の天幕で寝るのか、フィン?」

「ああ。迷惑をかけるけど、頼むよ椿」

一方、危機を先読みし別派閥の天幕にお邪魔させてもらっているフィン。男女の鍛冶師達の何とも言えない視線を浴びる彼は、溜息を堪えた表情で一泊の許可を椿に頂戴した。

「ふっふっふっ。では、宿代としてお前を抱き枕にさせてもらおうぞ?」

「あつ」

「勇者」一生の不覚であった。

犬の恩返し？

「ちッ、やつぱり集まり切らねえか」毒妖蛆ポイズン・ウエルミスの解毒薬やしなあ……」

日の光が降りそそぐオラリオの街角。ベートとロキは洪い声を出していた。

ベートが地上に帰還して既に一日。「毒」により18階層に残留する団員達を救うため自派閥総出で都市中を奔走しているが、成果は芳しくない。もともと毒妖蛆ポイズン・ウエルミスは下層域の中でも産出数が少ない「稀少種」寄りの種族だ。今回の大量発生が特別なだけであつて、同モンスターの体液ドロブライテムから作られる解毒薬の製造数は限りがある。数を揃えるのも一苦勞だ。

「後は、解毒薬の予備を確保してそうな【ファミリア】に交渉するしかねえか……」

「かと言つて正直に頼んでも、ここぞと足もと見られてふんだくられるか、後は嫌がらせでわざと出し渋られるか……どつちかやな」

都市最大派閥の足を引つ張ろうとする他派閥は多いことだろう。それにロキ達が解毒薬を買い占めていることを商人達がそろそろ察知する頃だ。間違ひなく特効薬の高騰が起きる。金に糸目をつけないが、そこまでいくと特効薬確保の泥沼になるに違ひない。

時間を更に浪費してしまう。目処がつかない解毒薬収集に、ベードは再度舌打ちをした。

「他派閥や商人に顔が広くて、後は穩便に譲るよう交渉できる代理人がおればええんやけど」

それも沢山、というロキのその言葉を聞き——ぴくつ、とベートは頭上の耳を微動させた。

「ロキ、お前は戻つて団員達と合流しろ。適当にまとめとけ」

「おっ、何か思いついたん？」

いいから行け、と主神と別れ、ベートは都市のとある場所へ足を向けた。

「げっ、【凶狼】!?」

【ヘルメス・ファミリア】のルルネは、本拠ホームに殴り込みもとい押しかけてきたベートに悲鳴を上げる。一方的に事情を告げるベートは、たじろぐ彼女に解毒薬をかき集めるよう告げた。

「24階層で死にかけてたためえ等を助けてやっただろ」

「た、確かに助けてもらったけどさあ……!!」

24階層の事件を持ち出され、呻く犬人の少女。正面玄関で繰り広げられるその光景を、他団員の小人族の少女や虎人の青年が怯えながら窺うかがっていた。

「今はヘルメス様もアスフィもいないんだ、勝手な真似をするわけには……!?」

「ためえ等がLv. をだまくらかしてんのを、ギルドにバラすぞ」

「きたねえー!」

結局解毒剤調達に強制協力、そして少なくない出費もさせられたルルネ達は後日、ヘルメスとともに18階層から帰還したアスフィに大目玉を食らうのだった。

怨敵呪うべし。慈悲はない

「テイオネさん、邪魔者を肅清する方法ってご存知ですか……」

「何よ、いきなり？ 物騒ねえ」

18階層【ロキ・ファミリア】の野営地である。

少年と女神達が現れた日の深夜。男神との面会から始まった話し合いを終え、二人で自分達の天幕に帰る最中、暗い瘴気を纏うレフィーヤにテイオネは肩を疎めた。

「実は私の特別な人に付き纏う不躰な輩がいるんです……それを完璧に排除するにはどうしたらいいのかなって」

「何よ、嫉妬？ レフィーヤ、あんたちよつとは余裕を持った方が——」

「もし団長の周囲にそんな輩がいたら、テイオネさんはどうしますか？」

「——殺すわ」

テイオネの双眸から光が消える。

「団長にすり寄ってくる発情した牝犬なんて八つ裂きにする。即時抹殺よ。団長が汚れてしまうもの。そうよ、絶対に許さない……」

「でも私達の特別な人はそんな輩が傷付いても悲しんでしまうかもしれないです。とても優

しいから……あの人が悲しむ姿は見たくない」

「くっ、厄介ね……団長の優しさに付け込むアバズレども、何て狡猾なのっ」

互いに自分の世界に没入する少女達は、妄想上の敵との格闘を続ける。

「闇討ち、奇襲……駄目ね、事件性を臭わせる時点で団長の耳に入ってしまう。二度と近付かないよう脅しても、相手が黙っている保証はないし……」

「警告の類も駄目なら……相手が自発的に身を引くように誘導、いえいつそ何か不幸が起きるように呪ってしまえば……」

「それよ！ 呪えばいいんだわ!! 呪詛なら足がつかない!!」

「そういえば前にリヴェリア様から兎を魔術儀式の材料にする話を聞きました……!」

「レフィーヤ、呪具ができたらぜひ私にも貸してね？ これなら団長に近寄る牝犬どもを——フフフフフフ」

「頼むガレス……あれを止めてきてくれ」

「嫌じゃ。首領はお主じゃら、自分で何とかしろ」

正気を失いながら不穏な会話をしているアマゾネスとエルフの少女を眺めながら、フィンが助けを求める。無二の友であるドワーフは近寄りたくないとはばかりに半眼で突っぱねた。

片手で腹部をさする小人族の団長の気苦労は絶えない。

## 王族と敬愛

「では、フィン。体を清めに行ってくる」

ベルと救助隊等が18階層に現れた日の深夜。リヴェリアはそう告げて野営地を後にした。

日中は我慢し、こうして人目を忍ぶように一人で森の泉を目指しているのは、他のエルフに気取られないためだ。一族の王女が沐浴するとなれば王妃に奉仕する女中よろしく同族の者達が放つておかない。リヴェリアは王族の里と変わらない扱いを嫌ったのである。が、「リヴェリア様、お供します」自分もぜひ「わ、私も行きます！」……

ぞろぞろと、リヴェリアの後に続く女性団員の長蛇の列。いつ感付いたのか、L.V.4のエリアから始まり下位団員の魔導士達、レフィーヤまで。リヴェリアは思わず眉間へ手を添えた。「アリシア、それにレフィーヤ達……いつも言っているだろう、私を王族として扱うなど」  
「ですがリヴェリア様、高貴な方ということ抜きにしても、可憐な乙女がたった一人で沐浴するなど危険です！ここは夜の森、下賤な男達もとい怪物にリヴェリア様の肌が晒されてしまったら……!!」「どうか私達を側に置いてください!」「」

懇願してくるアリシア達に王女は溜息をつき、時間の無駄だと悟って同行を許可した。エルフ達が揃って一礼する中、目的地に到着する。秘境の湧泉を彷彿させる狭い泉だ。

厳重な警備体制を敷くエルフ達に再び嘆息しながら、リヴェリアは脱衣に取りかかった。髪留めを解くと、結わえていた翡翠の長髪が清流のように流れ、滑らかな背中の上を踊る。レフィーヤ達が感嘆の息を漏らすのを脇に、一糸纏わない姿になったリヴェリアは沐浴を始める。そして美しい裸身を潤った水で洗っていると——リヴェリアの視界に謎の人影が現れた。

「てっ、敵襲ッ——!?!」

見張りの呼びかけが直ちに上がり、謎の人影もまた、すぐに森の奥へと姿を消す。

闖入者の存在にエルフ達が怒り狂う中、相手の姿を見たリヴェリアは片目を瞑る。

(あれは確か、救助隊の中にいた……覆面の冒険者?)

推察していると、相手が去った場所には、小さな水瓶と羊皮紙の巻物が置かれていた。

「こ、これは『アルウの清水』……!?!? ごくりっ、仕方ありません、私がまず毒味を……!」

「あ、アリシアさんズルイです!?!」一人で飲むうとしてます!」

「な、何を言っているのですか!?! 私はまだリヴェリア様のために……!」

地上を離れ二週間、エルフ達が恋しく思っている大好物、霊峰の清水を巡って言い合いが勃発する。彼女達を脇に、泉から上がったリヴェリアはもう一方の巻物を手に取った。

『敬愛なる王族へ』

達筆な共通語でしたためられた手紙と、貢物の清水を見て、エルフの王女は呟いた。

「覆面の冒険者……一体何者なんだ」

私も入れて

「ねえねえ、アルゴノウトくん！ 昨日の話の続きなんだけどさー！」

「あ、はい、何ですかティオナさん？」

会話をするティオナとベルを——アイズはじーと見つめていた。

ヘステリア達救助隊が18階層にやって来た翌朝のことである。朝食を済ませた野営地で、後片付けを終え手持ち無沙汰にしていた少年に、ティオナがにこやかに話しかけている。

肩と肩が触れ合いそんな少年と少女に、アイズの瞳は気付けば釘告げとなっていた。

何というか、距離感が妙に気になる。

あれである。自分に懐いていた野生の子兎が、他の者にも懐いてしまったような……。

寂しいような複雑のような、とにかく正体不明の感情を持ってあまし、そわそわしてしまふ。意気投合し、非常に仲睦まじげに会話するベル達に対し、ややあつて意を決するアイズ。

何とか二人の話題に割り込んで、仲間に入れてもらおうとするが——。

「じゃあ理想郷譚のエルナが仮面の騎士に出会う話知ってる？ 名前を知らずに別れちゃうやつ」えっ、そんな話ありましたっけ？ あつても理想郷譚なら骸骨王のお話も僕は——」

(ぜ、ぜんぜん、わからない……)

——戦慄がアイズを襲った。

幼い頃に母親から数々の童話を聞かされ、多少なりとも自信があつたもの、全く話に付いていけない。主神がいつぞや語っていた『この世には愛好家つちゆう筋金入りの専門家がおつてやな』という言葉を思い出し、眼前で繰り広げられる会話を汗を流した。

すっかり蚊帳の外に追いやられ、体をびよこびよこ何度も上下させていたアイズは、  
「じゃあアルゴノウト君、永遠の眠り姫のお話は？ あたし、あの物語が——」

その聞き覚えのある物語に、神速で反応した。

「わっ——私も知ってる——」

ぱっと身を乗り出し、大声で主張する。

そして、突如会話を割って入ってきたアイズに、ベルとティオナはきよんとした。

二人の不思議そうな視線を前に、思わず声を張り上げてしまったアイズは、かゝつと。珍しくも見事に、顔を赤く染めた。

「え、えっと、その……だ、だから……わたしも……」

真っ赤な顔をうつむかせ、消え入りそうな声で恥じらつてしまふ。

(かわいい)

(かわいい)

そんな少女にティオナはほにやと笑ひ、ベルは真っ赤になつて口もとを手で覆うのだった。

惚れられた弱み？

ふう、とフィンには腰かけている椅子を鳴らし、小さく息をついた。

【ロキ・ファミリア】本拠『黄昏の館』、その執務室である。西日が消え窓の外に宵闇が広がっている中、フィンは羊皮紙に滑らせていた羽根ペンを止め、室内を見回した。

「部屋は、こんなに広がったかな……」

ロキやアイズ達が港街に向かつて既に三日目。何かと補佐を受け持つてくれる副団長のリヴエリアがいない代わりに、何かと部屋に押しかけては付き纏ってくるあのアマゾネスの少女、ティオネもいない。おかげで執務が捗ることの上なかった。案件を片付けた羊皮紙の山を執務机に築き上げるフィンは、しかし覇気のない咬きを落とす。

「フィン、すまんがこの鍛冶大派閥との書類にも目を通しておいでくれ」

そこへ、ガレスが扉を開けて執務室に入ってきた。

「……なんじゃ？ 物足りないような顔をしておるが、騒ぐ者がおらんせいか？」

「そう見えるかい？ だとしたら随分と毒されているなあ」

面白そうに目を細めるガレスに、フィンは苦笑を浮かべた。実は今ガレスが入室する際に反射的に身構えてしまった、と打ち明けると「重症じゃな」とドワーフの知己は笑ってくれた。

「——団長！」

ガレスと談笑を交わしていた、その時だった。

港街へ行っている筈の猫人のアキが、執務室に駆け込んできたのは。

「アキ、どうしてここに？ 何かあったのかい？」

「ロキからの伝言です。ティオネと、ティオナが……」

息を切らず彼女の口から事情を聞いたフィンは、その湖面のごとき碧眼を細めた。椅子から立ち上がり、アキともどもガレスに指示を出す。

「ガレス、団員を全員集める。並行して街へアイズ達の武器を回収に行ってくれ。整備の途中でも構わない。港街に向かう」

「構わんが、ベート達は外の酒場で一杯やっとするぞ？ 全員の場合は知れん、どうする？」

「市壁の上に緊急用の団旗を立てる。街の住人や神々も使つて話を広めてもらおう、都市最大派閥に召集がかかって旗の下で集まってるってね。……ベート達もそれで駆け付けてくるだろう」

迅速な指示に【ロキ・ファミリア】は直ちに動き出す。

己の武装である《フォルティア・スピア》を持って、フィンも部屋を出た。

「全く、結局居ても居なくても振り回されっ放しだ……本当に退屈させてくれないな、君は」  
ほのかな笑みを浮かべるフィンは、次には首領の顔付きとなり、仲間の少女達を助けるため走り出していくのであった。

## 恋せよ乙女、もとい戦士達

「違う、一番強い雄は私を倒した犬人だ！」躍動する筋肉、鋭い眼差し、ちょっと可愛い犬の尻尾……！」「あんなのより狼人の雄の方がよっぽど強かっただろう!! 圧倒的で凶暴であの冷たい琥珀色の目で踏みにじられた時なんて……ゾ、ゾクゾクした!」「ヘタレそうならウルウとかいう奴も強かったよ! 荷物一杯持ってたけど、強かった!」「会いたい、私達を荒々しく打ちのめしていったあの雄達に会いたい……!!」

なにコレ怖い。

凄まじい形相で騒ぎまくるアマゾネス——闘国の戦士達を前に、バーチェはそう思った。

「はあ!? 遅えから! 最強は私達を倒したドワーフの親父だから!」

「あの人の拳に容赦なく殴り飛ばされた時——運命を感じたの!」

「忘れられない、あのたくましい雄の横顔……!」

ティオナ達に敗北を喫し『儀式』が失敗した後、港街までやって来た闘国の船の中でバーチェが目覚ますと、全てが変わっていた。いや、戦士達が豹変していた。

「あの人の、番になりたい!」

「あの雄の子を産みたい……!!」胸が、胸が痛い……苦しいんだあ」

具体的にはみんな発情していた。頬を二様に上気させ、戦士ではなく雌の顔となっている。完膚なきまでに自分達を倒した【ロキ・ファミリア】の男性団員に——自分達を蹂躪した強い雄どもに、彼女達はみな惚れてしまったのである。バーチェは知る由もないがティオネの時と全く同じ事例であった。闘国で育った弊害か、恋の『こ』も知らない戦士達はこれ以上なく初心だったのである。強い雄と巡り会い、容易く胸を打ち抜かれてしまうほど。

（私が気絶している間に一体何が……ふ、震えが止まらない、何なのだこの光景は）

雄とは接触せず、ティオナに敗北したバーチェは、うろたえながら怯えるしかなかった。

格下の筈の戦士達の黄色い悲鳴とその迫力に、彼女は確かにビビっていた。

極めつけは——。

「……はあ」

船内の窓辺に腰かけ、片膝を抱えている実姉。青い空と湖の光景を眺める彼女の横顔は、頻りに切なそうな吐息をついていた。かと思えば、殴られた跡のある頬を指でそつと撫でて——いやんいやんつ、とだらしな顔を横に振る始末である。

やばい、死にたい。

「カーリー、助けてくれ……お願い助けて」

「マジで闘国終わったかの……!」

涙目になって神の救済を求める眷族の隣で、女神は遠い眼差しで虚しく呟くのだった。



## 在りし日のトラウマ

「待てアイズ、水泳の訓練はどうした！」

——また来た。幼いアイズは、響き渡る王族の怒鳴り声を聞いてそう思った。

「……フィンが、戦い方を教えてくれるっていうから……」

「今日は私と泳ぎの練習をする予定だっただろう！一生カナヅチのままにいるつもりか！」  
約九年前、在りし日のことである。小さな体相応の短剣を持ってこそそこそと館を出ていこうとする七歳のアイズを捕まえ、リヴェリアは咎めていた。

「……泳ぐ練習なんて、戦いに必要ない……」

「馬鹿者っ。ダンジョンで水中戦を強いられた時、同じことが言えるのか！」

剣の練習にかまけようとする少女は突った目付きで反抗的な態度であった。出会った当初、アイズはロキ達、そしてリヴェリアと決して最初から仲がいいわけではなかった。むしろアイズは反抗心の塊で——当時から「」の身を鍛え上げることを何よりも優先させ——、それこそリヴェリアが子供に言ってる聞かせる母親のように説教をしない日はなかったほどだ。

「長所を伸ばすこともこれ以上にならない武器になるが、短所を克服することも同様に重要だ。お前はまだそのところが——」などとガミガミ煩わしく叱りつけるリヴェリアに、表情が

乏しかったアイズの顔にも悪感情が募っていく。そして——少女は言ってしまったのだ。

「……おばさん」

びくっ、と長いエルフの耳が揺れた瞬間、リヴェリアは極寒の冷たさをもって瞳を細めた。  
「水の怖さを理解させる必要があるようだ……年上の者に対する、敬い方も」

「——とまあ、こんな感じでアイズさんはリヴェリアに悪夢を植え付けられたんや」

「だからっ、リヴェリアは一体何をしたのよ!？」

「肝心なところ、肝心なところ!!」

「それはほら、あれや、ちょうどあった超硬金属の塊をアイズさんの手足に縛りつけて水ん中放り込むのは序の口で……」

「泳げる筈じゃないですかー!？」

港街の事件が解決した後日。本拠の談話室でカナヅチを決定的にしたアイズとリヴェリアの昔話を語るロキに、ティオネ、ティオナ、レフィーヤは順々に悲鳴と絶叫を上げる。

「なんだ、アイズ。まだ泳ぐことができないのか？ どれ、久しぶりに私と練習でもするか」

「!？」

談話室を通りかかったリヴェリアにまさかの提案をされ、びくうっ!？とアイズは肩を揺らし、ガクガクブルブル震えるのだった。

コクハク？

【ヘステシア・ファミリア】の劇的な勝利で幕を閉じた戦争遊戯、それから数日後。

アイズは白い花束を携え、てくてくと街を歩いていた。

「お祝いのお花も持ったし、これで大丈夫……」

アイズはこれから【ヘステシア・ファミリア】の本拠へ赴き、この花束を手渡すつもりだった。戦争遊戯のために鍛練を引き受けた相手、ベル・クラネルを祝うためである。

晴れ渡った青空の下、主神の助言を受けて購入した純白の花束を後生大事そうに抱え直す。

「それに……言わなくちゃいけないことも、あるし」

アイズは勝利したベルに、いや強くなった少年に、言わなくてはいけないことがあった。

その時の光景を想像するだけで、今から頬が熱くなる。羞恥を堪えてぎゅつと花束を抱えるその姿は、傍から見れば、そう、まるでこれより告白に臨もうとする初心な少女にも映っただろう。事実、【劍姫】の様子に見惚れるやら動揺やら悲鳴やらを行う者達が周囲で続出した。

「頑張らなくちゃ……」

決心をして、アイズはむんつと気合を入れた。

【戦争遊戯 おめでどう……】【ファミリア】も大きくなって、良かったね」

本拠の前で純白の花束を受け取った少年、ベル・クラネルは感激の絶頂にあった。

「ほ、本当にありがとうございます、アイズさん！ う、嬉しいなあ……！」

憧れの存在に祝われ、笑顔を必死に自制していたベルは、ふと少女の様子に気が付く。

（あれ、アイズさん……何だか、もじもじしてる……？）

その通りアイズはもじもじしていた。頬をうつすらと染め、小振りな唇を何度も開けかけては閉じ、どうやらベルに何かを伝えようとしているようだった。

（こ、これは、まさか——）

花束を持って、頬を赤らめて、何かを必死に伝えようとするその行為とは——告白？

この状況で万人が思い浮かべる至極真つ当な答えに行きついた少年は、ぼしゅんつ！と一瞬で頭を茹蛸状態にした。いやまさかっ、と必死に否定するも胸の高鳴りは止まらない。

——すくく強くなったね。私、そんな君のことが——。

瞳を潤ませるアイズを前にそんな幻聴が聞こえてくる。ベルはごくりと喉を鳴らした。

やがて、意を決したアイズがその唇を開いて——。

「——Lv. 3の昇格、どうやったたらあんなに早くできるのっ？」

「ですよねー」

強くなることしか頭にない天然剣士に、少年は乾いた笑みを作りさめざめと泣くのがあった。

## アイは貴方の胸に

都市を賑わせた戦争遊戯から日が経った、ある昼下がりのことだった。

大通りを気ままに歩いていたティオナは、雑踏の中に見覚えのある後ろ姿を発見した。

「アルゴノウト君だ！」

声を上げるより先に体が動いていた。勢いよく走り出し、少年の背中に飛び付く。

「アルゴノウトくん!!」

「わあっ!」

後ろから飛び付かれた少年——ベル・クラネルは当然のように仰天した。

ついアイズやレフィーヤにするように抱き着いてしまったティオナだが、まあいいつか!と破顔する。戦争遊戯を制した少年の勇姿を思い出し——それこそ新しい英雄譚を目にした子供のように——興奮した口調で喋り始めた。

「おめでとう、アルゴノウト君! 戦争遊戯すごかったよ!! あたし『鏡』の前ですつとはしゃいじゃった! あ、アイズからお祝いの花束もらった? あたしも一緒に渡しに行きたかったんだけど、用事があったっていけなくてさあ!」

背中に抱き着いたまま、細い両足をベルの胴に巻き付け、白髪の後頭部を抱き締めてはよし

よしとかき混ぜる。往來の真ん中で猿のようにじゃれ付く少女に、衆目はぎよつとしていた。

「それでね、フィン達もアルゴノウト君はすごいって……あれ、どうしたの?」

頬を染めながら一方的にまくし立てていたティオナは、何も話さないベルに小首を傾げる。うつむいて、耳まで真っ赤にしている少年は……かき消えそうな声で呟いた。

「ティ、ティオナ、さん……むっ、胸がっ、当たって……」

羞恥で顔を真っ赤にしながらかぼそぼそと呟くベルに、ティオナはびたりと動きを止めた。なるほど、少年の後頭部にはティオナの『胸』が当たっている。

僅かなふくらみだが、確かな『胸』がベルの頭に柔らかく密着している。

ティオナは、おもむろに天を仰いだ。

脳裏に蘇るのは、『べちゃばい』『べったんこー』などと散々投げかけられてきた侮辱の数々。自分の『胸』で恥ずかかしている少年に視線を戻した少女は、にへらっ、と相好を崩す。

「ちよ、ちよっ!?! ティオナさんっ、何でさっさより強く抱き着いてくるんですか!?!」

「……」

「む、無言で胸を押し付けないうでござあい!? 何でニヤニヤ笑ってるんですかあ!?!」

「……えへへっ」

「ちよ、やめっ——勘弁してくださいさあああああああああああああああい!?!」

泣き喚く少年と、彼にグイグイと胸を押し付ける少女を見て、人々は首を傾げるのだった。

## 走る少女少女

【ハステリア・ファミリア】が勝利した戦争遊戯後、街は連日賑わっていた。

それこそ勝利の立役者にして、大将同士の一騎討ちを制した冒険者ベル・クラネルを持てはやす声は絶えることなく、通りを歩いていけば必ずどこかで聞こえてくるほどだった。

「ベル・クラネル格好良かった！ 弱そうなのに！」【リトル・ルーキー】「ってすごいんだね！ 兎みたいなのに！」『世界最速兎は伊達じゃなかったんだな！ ひよろひよろしてるが！』

などと、老若男女のヒューマンと亜人が笑みを浮かべ、話題を持ち切りにしていた。「うぬぬっ……！」

そんな声々を街角で聞くレフィーヤは、少年への称賛に複雑を通り過ぎた思いを抱く。

嫉んでいるのか、悔しがっているのか、焦っているのか、それともあの一騎討ちの勇姿を見て胸が熱くなってしまったのか……：自分でもよくわからなかった。

ただ確かなのは、今のレフィーヤはベルを意識せずにはいられないということだ。

（確かにすごかったですけど、すごかったですけど！ ちよつと格好良かったですけど！ でも当の本人は他派閥のアイズさんに一々甘えてきてっ、厚顔無恥でっ、不躰でっ！ 女の人にだらしなみみたいですし！ えーっと、それから……！）

聞こえてくる街の評判と張り合うように、いつの間にか少年の短所や難点を列挙していた。

膨れながら街を歩き、対抗心だけを燃え上がらせていたレフィーヤは——そこで少年の名を呼ぶ声を聞く。

「おい、【リトル・ルーキー】！ どこへ行くんだ！」

「！」

はっとして声の方向に振り向けば、通りを走っていく白髪の少年の姿が見えた。

「みんなと一緒にダンジョンへ！」

「おお、頑張れよ！ ほら、持ってけ！」

「ありがとうございます！」

果物屋の店主から林檎を受け取り、周囲の応援の声に照れ恥しながら、蒼穹に突き立つ巨塔へと走っていく。

少年はああして、いつも走ってきたのだろう。

ダンジョンを目指して。目標に向かって。前を向いて。愚直に、ひたすらに。

「……私だって！」

視線の先の光景を見て、レフィーヤも走り出す。

胸の中のものもやもやも、不毛な粗探しも、綺麗さっぱり消えていた。灯るのは強い意志だ。絶対に負けない。決意を新たにする少女は、自らもダンジョンへ向かうのだった。

## アマゾネス劇場

「テリオネー」

「何よ」

ある日の昼下がり、本拠ホームのある双子の相部屋。

寝台ベッドでくつろいでいるテリオネに、同じく寝台ベッドでだらけているテリオナが声をかける。

「最近さあー。ラウル達が視線を感じるんだってー」

「視線？ どういうことよ？」

「誰かに見られてるような、とにかく油断すればペロリと食べられそうな悪寒おかしななんだってー」

「他派閥の嫌がらせじゃないの？ そんなのこつちから行って追っ払えばいいじゃない」

べらり、と恋の必読本の頁ページをめくるテリオネ。ごろり、と寝返りを打つテリオナ。

「テリオネー」

「何よ」

「最近、アマゾネス達が都市内オウリヤに侵入してくるんだってー」

「はあ？ ギルドの検問は何やってるのよ？」

「商会の積荷まきに紛れてやり過まぎごしたり、獣みたいに強行突破するらしいよー」

「何よ、それ。だらしないわねえ。ガネーシヤのこの門衛もなにやってるんだか」

用意したジャガ丸くんを食べるテリオネ。こつそりもらおうとして手を弾かれるテリオナ。

「テリオネー」

「だからっ、何よっ。さつきから」

「そのアマゾネスの中にさあ、蛇へびみたいですごい強いのがいるんだってー」

「ちよつとっ、**怒蛇へび**なんて変な二つ名付けられた私だって言いたいわけ？」

「違ちがうよー。そのアマゾネス、運命の雄おすに会いに来たってずつと言ってるんだってー」

「何よ、そいつ。気持ち悪いわね、頭かぶが沸わいてるんじゃないの？」

ぷりぷり怒りながら本を読み直すテリオネ。ぽーつと天井てんじやうを見上げるテリオナ。

「あとねー、小人族バルムに思おもいつ切りブン殴ぶられた痛みいたみが忘れられないって言ってるらしいよー」

「……………」

一気に押し黙るテリオネ。ジャガ丸くんを奪うばうことに成功するテリオナ。

「テリオネー」

「……………」

「言い忘れてたけど、さつきフィンが闘た国のアマゾネスに追い回まわされてたらしいよー」

「アルガナア!!」

鬼の形相で部屋を飛び出す姉を尻目に、妹はむしゃむしゃと芋いもを頬張ほ張るのだった。

## 迷宮街の恋愛話・裏

「それじゃあ、アイズは？」

夜の帳が下りた『ダイダロス通り』。

ダンジョン第二の出入り口を探していた少女達は、恋の話に花を咲かせていた。

「……別に、そういう人は……」

「ほんのちよつとくらい気になった、っていう人くらいいるでしょ？ ほらほら！」

ことの起こりは、迷宮街を探索するアイズ達のもとにフィルヴィスが合流したことだった。

取っつきにくい彼女と交流を深めようと、どうしてもそうなったのか恋愛話をしようという流れになったのである。

当の本人のフィルヴィスが質問攻めに遭いすっかりぐったりしている中、満面の笑みのティオナ、全力で聞き耳を立てるレフィーヤ、他の団員達が興味津々の様子でアイズの答えを待っている。

「私は……」

困り果てていたアイズが、持てあましていた唇をおすおすと開こうとした。その時だった。

「あ、あのおー！ すいませえーん、助けてくださあーい!？」

非常に情けない、少年と思しき声が響き渡ったのは。

(……………この声って?)

その聞き覚えのある声に、真っ先に反応したのはアイズだった。

振り向けは、複雑に分かれた隘路の一つに揺らめく光源がある。

道の奥から近付いてくる魔石灯の明かりにティオナ達が不思議そうな顔をしていると、ほどなくして人影はアイズ達の前に現れた。

「まっ、迷って迷宮街から出られなくなっちゃって……み、道を教えてくれませんか……!？」

夜の闇の中で浮かび上がる白の髪。

半べそをかいている深紅の瞳。

まさに白兔を彷彿させる、一人の少年だった。

「……えっ?」

きよとん、としている【ロキ・ファミリア】の面々に、少年もまた啞然とする。

「……ベル?」

お互いが動きを止める中、唇を開きかけていたアイズは、その名を呟いた。

「アルゴノウト君だー! えーっ、なんでー!」

「どっ、どどどどどうして貴方がここに!？」

止まっていた時間が動き出す。

破顔するティオナと動揺するレフィーヤを皮切りに、少女達は喧騒に包まれた。

「ろ、ろっ、【ロキ・ファミリア】!? それに、アイズさん!?」

「うん……こんばんは?」

「こっ、こんばんは!!」

アイズが小首を傾げながら挨拶すると、白髪の少年も勢いよく頭を下げる。

この慌て振り、間違いなかった。先日の戦争遊戯で大金星を上げた【ヘステシア・ファミリア】の冒険者、ベル・クラネルである。

顔を上げたベルは、混乱が抜け切らない表情でアイズ達【ロキ・ファミリア】を見渡す。

「ど、どうしてアイズさん達がこんなところに、夜遅くいるんですか……?」

「あー、あれよ、あれ、極東の有名な例の儀式……そう、肝試し」

「き、肝試し……」

第二の出入り口の存在を知らせないよう誤魔化したティオナの返答に、ベルは腑に落ちなそうにしながらも、取りあえず受け入れたようだった。

「そういうあんたは? どうしてこんなところにいるわけ?」

「えっ——」

ティオネが尋ね返した途端、びたり、と。

ベルはいきなり固まった。

その様子にアイズが不思議そうな顔をしていると、ティオナが鼻をすんすんと鳴らし始める。

「あれ、アルゴノウト君? 香水かなんか付けてるー? 何か甘ったるい匂いがするけど」

彼女の他にも、獣人の少女達も頻りに鼻を鳴らしていた。

アイズも彼女達に做ってみると、なるほど、確かにベルから嗅ぎ慣れていない香りが僅かに漂っている。男性、ともすれば純朴な少年には一切縁などないような……何とというか、

そう、どこか淫靡な香気だ。

「えっ、あ、いや、その……!」

当のベルはというと汗を流し、盛大に言葉に詰まっていた。

ティオナの質問に答えられず、視線を忙しなく左右に振り始める。

「この香り……確か」

喉に小骨が引つかかっているように、猫人のアキが眉をひそめる。

そして彼女の唇が思い至るより早く、それまで黙っていたフィルヴィスが瞳を細め、呟いた。

「麝香……」

びくっつ、と少年の肩が震える。

彼を見るフィルヴィスの双眼は、極寒のごとく冷め切っていた。

「麝香って、えっと、その、アレですよね……?」



少年を見る瞳は既に汚物を見る目であった。容姿端麗ようすたんれいのエルフの中でも殊更ことごとく美しい彼女の容赦ようしやない言葉に、ベルはどうとう「がはあ!」と吐血する。

潔癖けつぺきのきらいがあるレフィーヤ達、エルフほどではないにしても、【ロキ・ファミリア】の少女達も落ち着かなくなる者が大半であった。ある者は赤面し、ある者は軽蔑し、ある者は呆れ果てる。

そして、アイズはというと……無言であった。

一見、普段の感情の乏しい表情に見えるが、金の瞳の中身はぐるぐると回っている。

凍てついた氷像のように動かない彼女の代わりに、心の中では幼い自分アイズが真っ赤な顔を両手で覆っていた。「わー!? わー!?」と悲鳴を上げながら、盛大に地面を駆け回っている。

(娼館………女の、人と………ここによこによ、する場所………)

知識ははつきり言って碌ろくにないが、娼館が『どーいう場所』かは知っている。

アイズは、自分が(戦い方など)色々教えてきた少年が、遠のいたような錯覚を覚えた。

まるで近所の少年の意外な一面を目の当たりにしたような……いや、飼っていた兎が自分の知らない場所へ巣立って行ってしまったような。

「アルゴノウト君もやっぱり男の子なんだー。んー、よくわかんないけど、ちよつと残念かも」

「だから違うんです、ティオナさん! 僕は何も……!」

「でもでも、大丈夫だよ! 女戦士メソウネスも似たようなもんだし! 恥はづかしくなくて! 多分!」

「ちよ………!?」

「やることやってんのねえ、あんたも」

「ティオネさん、違うんですうう……!」

少女達の中でも、女戦士メソウネスであるティオナとティオネの反応は変わらずであった。

頭を抱えて呻うめき苦しむベルを、アイズはそっと見つめる。

(……胸が、ざわざわする)

胸の端つこが落ち着かない。動揺しているのだろうか、私アイズは。

そこで視線に気付いたのか、ベルがこちらに振り向く。

「あ………」

「……!」

ぱっちり目と目が合ったアイズは何故なぜかうろたえてしまい……ふい、と思わず視線を逸らしてしまった。

ガン!! と本日一番の衝撃を被るベル。

この世が終わったような顔をする少年に、レフィーヤやティオナ達は「瞬ひる怯ひるんだ。

「あー……私達、大通りの方に行くけど、それでよければ付いてくる?」

「はい………」

惨たらしく首を折るベルに若干引きながらティオネが提案すると、白髪の後頭部は碌に喋れ

ず、僅かな領きだけを返す。

そんなこんなで、道に迷った迷子を加えたアイズ達は進行を再開させた。

「本当に幻滅しました！ 何てふしだらな……！」

「レフィーヤ、何でそんなアルゴノウト君にだけ怒ってるのー？ いつもなら他の人の話を聞いても、恥ずかしがるだけじゃーん」

「そつ、それはつ、宿敵だから……じゃなくてつ。戦争遊戯ウォーゲームでちよつと有名になったからつ、すぐこんな夜遊びに手を出しているのが気に食わないんです！ ただの俗物です！ アイズさんに教えを受けた者つ、もとい冒険者たる者もつと適進して……！」

まだ顔を赤くしながらレフィーヤだけがぶりぶりと怒っている。彼女のおかげで騒がしさは途切れないものの、一行の間にはやはり居たたまれない空気があった。

その原因は項垂なだれながらこの世の終わりの暗氣オムラを放つ少年であったり、普段とははつきり違うと見て取れる【劍姫】の他所よそ他所よそしさであったりした。

自然、同伴するベルと少女達の間には、不自然な間合いが置かれている。

「え、えーと、歓楽街といえは、【ロキ・ファミリア】の中ではどうなんでしょうか？ 娼館を……り、利用している男性団員達はいたり……あの、あう……」

「赤くなるくらいなら触れなければいいじゃない、リーネ……ま、ラウル辺りは通っていた時期があったわよ」

「ええっ？」

「そこでたちの悪い女に引つかかったみたい。『遠征』の収入、ちよろまかしたことが一回あったでしょ？ あれ、その女に貢ぐためだったんだから」

「ラウルさん……」

「あんな性格だから、手を繋ぐ以上のことはできなかつたみたいけど……まったく、自分を變えるためだとか何だか知らないけど、娼館なんて行かなければいいのに」

必死に話題を探すリーネに、アキは嘆息交じりに応答する。

「これだから男は……。アキ達の会話を聞いて、そんな空気がパーティの中に充滿した。

「んー、もつと賑にぎやかに行こうよ！ そうだ、恋愛話の続き、しよっ！」  
そんな仲間達の機微を感じ取つてか、ティオナが窮屈きよくそうに声を上げる。

両手を振つて、みなに呼びかけた。

「……恋愛話？」

「そーそー！ さっきまでみんなの気になる人、言い合いつこしてたんだ！」

おもむろに顔を上げるベルに、ティオナは無邪むじや気に笑いかける。

異性の恋愛話、と聞いて、ベルは気まずそうに「ええつと、その……」と言葉を選びかねる。

「ちようどアイズの番だったんだ！ ねー！」

「……！」

そう言つてテイオナがアイズの背に抱き着くと、ベルははつとした。途端に挙動不審となり、未だ気まずそうに、けれど金髪金眼の少女の横顔をちらちらと窺い始める。

他の団員達も、そういえばそうだった、と視線をアイズに向けた。

「ほら、アイズ！ 気になる人とか、いる？」

「……私、は」

背にしがみつくとテイオナにせがまれ、アイズはやはり困つたように視線をさまよわせた。ややあつて。

自分のことを見やってくる少年をちらりと一瞥した後、ゆつくりと口を開く。

「私は……気になっている人は……いない、けど……」

「けど？」

「……他の女のひとと、遊んじゃう人は……嫌、かな」

グサツ!! と。

何かが刺さる、凄まじい音が響いた。

主に胸を押さえる少年の方角から。

「歓楽街に、行っちゃう人、とか……」

「おふっ!?!」

「麝香の香りがする人、とか……」

「かはあ!?!」

「……私は、嫌だな」

「くへあ!?!」

ベルから目を背けながら、ぼそぼそと呟くアイズ。

直撃な意見に少年の体が折れ曲がっては仰け反る。その反応の度合いは先程のレフィー

ヤの比ではなかった。

「で、ですよね!?! そうですねアイズさん！ 夜遊びする人なんでもつてのほかですよね!」

「……うん」

アイズに諸手を上げて賛同するのはレフィーヤだ。

目の前まで来て嬉しそうに笑いかけてくる後輩に、金の長髪を揺らしながら頷きを返した。

「アイズさんが総非難……!」

「これは珍しい!」

「よっぽどだらしがない人が嫌いなんだな」

別の意味で他の団員達も賑わい、顔を寄せ合つてひそひそと話を交わす。

テイオネとアキは苦笑しつつも、強くなること以外無関心である筈のアイズの意外な答えに、不思議そうな感情を滲ませていた。フィルヴィスは瞋目して我関さずの姿勢だ。

「う、う……」  
 そしてベルは。

「ずうーん、とめり込む勢いで通りの壁に寄りかかっていた。瀕死である。影を背負う体から、今にも魂が立ち昇りそうであった。」

「うーん……」

壁に縋り付いたまま置いていかれるベルと、寂しそうにうつむくアイズの横顔を、ティオナは交互に見た。

意を決したようにアイズの背から離れ、つけてけと小走りし、集団の後方に位置する少年のもとへ近寄る。

「ねえ、アルゴノウト君？」

「はい……」

「本当に歓楽街で遊んでないの？」

「傷心の後頭部に尋ねると、がばつ！ と勢いよく跳ね上がった。」

「遊んでません遊んでませんっ、遊べる筈ありません！ 本当に何もしてないんです!!」

「主神様に誓って？」

「ハステティア様に誓って!!」

目を瞑って顔を縦に振りまくるベルを、ティオナは「ふむ」と腕を組んだ。

主神の名に誓ってまでこう言っているのだ。嘘は付いているとは思えにくい。

「それじゃあ、何で歓楽街になんか行つたの？ あそこには間違いないんでしょ？」

「派閥に加わつたばかりの人が、一人で歓楽街に行っちゃって……心配してヴェルフ達あー、他の仲間と一緒に後を追つたんですけど……尾行してる途中、僕だけはぐれちゃって」

「じゃあ、その麝香の香りは？」

「こ、これは、その……アマゾネスの娼婦達に、誘拐されちゃって……」

「え？」と目が点になるティオナ。

「もしかして、娼館に無理矢理連れてかれた……とか？」

「……はい」

「だ、大丈夫だったのっ？ 食べられなかったっ？」

ティオナ自身は変わり種だが、アマゾネスは元来、異性に対して食欲であり肉食だ。

自分より強い、あるいは気に入った雄には舌舐めずりをせずにはいられない。姉であるティオナも——団長限定で——猛烈な襲撃を仕掛けている。

ティオナが今になって兎の操を本気で心配し始めると、ベルの目から光が消えた。

「大丈夫、でしたけど……」

「け、けど？」

「……女の人怖い女の人女の人怖いっ、アマゾネス怖いアマゾネス怖い蛙怖い……!!」

悪夢の逃走劇を思い出したのか、体をかき抱きガタガタと震え始めるベル。その異常な様子に思わず一步後退ってしまったティオナは、あちゃー、と片手で顔を覆う。どうやらティオナの同族が心傷を植えかけてしまったらしい。

同時に、少年の言っていることは本当だと、ティオナは信用した。

「うん、わかった。アルゴノウト君の言ってること、信じるよ」

「……えっ?」

「あたし馬鹿だけど、アルゴノウト君が嘘を言っていないことはわかるよ」

流石にあんな姿を見せられたら、と苦笑しつつ、呆けるベルへ笑いかける。

「あたしに任せて。アイズと、後はみんなの誤解、解いてきてあげる!」

「ティ、ティオナさあん……!」

「へへーんっ。じゃあ、ちょっと待ってて!」

比喩抜きで感涙する少年に得意気になりながら、ティオナは再びでけてけと走り出す。

ベルに感謝され喜んでいる自分がいる。それは認めたティオナは、これはいい気持ちだと破顔した。

ティオナは少女のことが好きだ。

まだ短い交流に過ぎないが少年のことも気に入っている。

好きな二人がぎくしゃくしているのは、ティオナの望むところではない。見かねて動いてし

まったのも、つまりそういうことだ。

「アイズ! アルゴノウト君、歓楽街で遊んでないって!」

「……えっ?」

「事情があったらしいよ!」

ティオナはまずアイズに突撃した。

再度背中に抱き着かれたアイズは、きよとんと瞬きを繰り返す。そんな彼女にアマゾネスの少女は説明していく。

「……アマゾネスに誘拐されて……追い回されて?」

「あそこ、『イシユタル・ファミリア』の戦闘婚姻がいるじゃん。アルゴノウト君、戦争遊戯で有名になったから、きつと狙われちゃったんだよ」

「……」

ティオナの話聞いて、アイズは黙って考え込む。

ちら、と後ろの方を顧みれば、集団の最後尾にいるベルが判決を待つ被告人のような面持ちでいた。

「ティオナ、私……」

「うん、行ってらっしゃい!」

ごめん、と言ってアイズは一人、歩みを遅らせた。

団員達に追い抜かされながら、すすすす、とさりげなく最後尾まで移動する。

「ア、アイズさん……」

「……」

真隣までやって来たアイズに、ベルが緊張する。

口下手なアイズ自身も何をどう言っただけ切り出すべきか、悩んでいた。

視線を左右に振ること数度、逡巡していたアイズだったが、意を決して口を開く。

「テイオナから、話を聞いたけど……本当？」

「は、はいっ！」

直立不動となるベルのの深紅の瞳を、金の瞳がじーっと見つめる。

テイオナと同じように、アイズもベルが嘘を言っていないと感じた。

胸騒ぎが消え、代わりに安堵を得る。立ち止まってベルと見つめ合っていたアイズはほっ

とした。

その直後、途端に芽生えるのは申し訳なさだった。

「……えっと、その」

「？」

「ごめん、ね？」

勘違いして、と。

アイズは睫毛を揺らしながら目を伏せる。

何故か強い衝撃に打ちひしがれ、話を聞いてあげられなかった自分が恥ずかしかった。

両の瞳を見開いていたベルは、彼女の謝罪に慌てて手を振る。

「い、いえっ!? 誤解されてもしょうがないっていうか、むしろ信じてもらえて嬉しいという

か! ……だから、その……気にしないでください」

「……ありがとう」

こんな時でも気遣ってくる少年の心遣いに、アイズはやはり申し訳なさを覚えつつ、目を細めた。

その微かな笑みに、ベルは思わずと言った風に頬を染める。

「酷いこと、されなかった？」

「は、はい 大丈夫です。……ぎりぎりです」

「そっか……」

「え、えっと……？」

アイズの手が、白い髪を撫でた。

赤面したままのベルは隣を繰り返して、身をよじるが、アイズはよしよしと撫でる手を止めない。

あれである。家出していた子鬼が自分のもとに戻ってきてくれた感覚。

心の中で幼い自分も白いモコモコに頬ずりする中、アイズは頬を綻ばせた。そして胸を撫で下ろすベルと、笑い合った。

「む、むむむっ……」

他方、そんな二人を見て難しい声を出すのはレフィーヤである。

今もテイオナが団員達に話して誤解を解いている最中、罪悪感を抱いていた。

（酷いこと言っちゃいましたし、私も謝った方が……でもあんなの誤解してもしょうがないというかつ、いえ話を聞かなかった私が全面的に悪いんですけど……ええいつ、もう！）

少年への様々な感情が邪魔して素直になれなかったレフィーヤだが、思い切ってベル達に向かって足を踏み出した。

そんな謝罪に赴く彼女——自分の過ちを認められる同胞の姿を見ていたフィルヴィスは、人知れず微笑む。

笑みはそのまま、目を閉じて自らもレフィーヤの後に続いた。非礼を詫びるために。

「あ、あの！」

「あ、レフィーヤさん……」

「えっと、その、さつきは……」

アイズとの会話を中断して、ベルが振り向く。

目を合わせられず口ごもっていたレフィーヤは、素直になつて謝ろうとした。

その時、ころん、と。

ベルの腰巾着から何かが落ち、石畳の上に転がった。

「……？ これは……」

盤棋の駒にも似た透明な容器、中身は赤い溶液。

見慣れない薬に、何かの道具かと首を傾げながら拾おうとすると——ベルの手が音速でそれを奪い取った。

「こ、これは、そのっ……あ、あはははははっ」

レフィーヤが固まっていると、ベルは薬を持った両手を隠し、不自然な空笑いを始めた。誤魔化そうと試みているのだろう。しかし少年はあまりにも嘘が下手くそ過ぎた。

——怪しい。

瞬く間にレフィーヤの眉が吊り上がる。

「ちよっとつ、今隠したのは何なんですか？」

「い、いやっ、これはっ……!? 僕のじゃないというか預かっているという押し付けられたというかつ、本当にどうしようもない理由があつて……！」

汗を流すベルはしどろもどろとなり、それがレフィーヤの猜疑心に拍車をかける。

詳しく話を聞こうと詰め寄ろうとしたその時、側にいるフィルヴィスがぼそつと呟いた。

「精力剤……」

瞬間、時が止まる。

アイズも、レフィーヤも、微笑ましく一部始終を見守っていた筈のティオナ達も。

薄暗い夜の通りに耳を貫く静寂が訪れ、蒼白となった少年の頬から一筋の汗が滴り落ちた。麝香の件から引き続き、絶対零度の眼差しを向けるフィルヴィスが再び爆弾を投下する。

「は、はあ~~~~~」

レフィーヤもまた、再び爆発した。

「せつ、せつ、精力剤!? 何でそんなもの持つてるんですかあ!? 全部誤解だったんじゃないやなかつたんですか!」

「違います違います違います!? いえ違くはないんですけど、とにかく違うんですう!?」

「なにわけのわからないこと言ってるんですか! ちょっととそれ、見せてください!!」

「待ってっ、待ってくださいレフィーヤさん!」

すっかり混乱に陥って泣き叫ぶベルに、真偽を確かめるため薬を奪おうとするレフィーヤ。アイズがおろおろする前で、二人の両手が猛烈な引き合いをしていると——つるつ、と。

「あ」

間拔けな声とともに、ベルの手の中から容器がすっぱ抜ける。

少女の頭上を舞う容器は、反動で蓋が外れ、運命に従うように中身を飛び散らせる。

次の瞬間、びしゃっ! とレフィーヤは頭から被った。

精力剤を。

「あ——」

ベルは蒼白となる。アイズも声を失う。フィルヴィスも凍りつく。

ティオナやティオネ達も、口を半開きにする。

「……………」

掴みかかっていたレフィーヤの両手が、だらりと垂れ下がった。

少女の美しい山吹色の髪を、柔らかそうな肌を、赤い溶液が伝っていく。

やがて漂ってくるのは、歓楽街に蔓延しているものと同じ独特の異臭。間違っても可憐な

少女が、潔癖な妖精が放ってはいけない強臭。

レフィーヤの瞳が一切の光を失い、果てしない闇に覆われる。

「あっ、あっ——」

小刻みに震えるエルフの少女が、本日最大の大爆発を迎えた。

「——貴方って人はあああああああああああああああああああああああああああああッ!!」

「——ごめんなさあああああああああああああああああああああああああああッ!」

憤怒の咆哮を上げるレフィーヤから、ベルは一目散に逃げ出した。床に落ちた精力剤を拾い上げ、まさしく脱兎のごとく駆け抜ける。それに続く妖精も比類の速度で追走した。

「レ、レフィーヤ!」

「アルゴノウトくん!?」

アイズとティオナの叫びも追いつかない。顔を引きつらせるティオネ、フィルヴィス、アキ達を置き去りにして、凄まじい風が巻き起こった。

少年と少女は迷宮街の闇へと消えるのだった。



怒りの妖精と化したレフィーヤを消失したアイス達は、ロキ達との合流を断念。

慌てながら少女と少年の行方を探した。

発見したのは夜が明けた翌朝。

兎を取り逃がし、悲しみとやるせなさのあまり一人しくしくと泣いていたエルフを、無事に保護した。

「何があつたんや、一体……」

リヴェリアの胸の中で泣き喚くレフィーヤを見て、ロキが放った言葉である。

少女の名誉のためにも打ち明けられず、アイズやティオナ達は気まずそうに目を逸らすことしかできなかった。あやすように山吹色の髪を何度も撫でるハイエルフの副団長から、嘆息が途切れることもなかった。

【ロキ・ファミリア】は一人の少女に深い傷跡を残し、この日、『ダイダロス通り』から撤退するのだった。

「に、逃げ切った……レフィーヤさん、ごめんさい……」

一方、ぼろぼろの体を引きずりながら、一人の冒険者も『ダイダロス通り』を後にした。

一晩中駆け回り、迷宮街から何とか脱出した少年は、眩しい朝日に瞳を焼かれながら今ある生を噛み締めるのだった。

だが少年は知らない。

この後、心配を募らせていた女神に、朝帰りの現場を目撃されることを。

体からぶんぶんと匂う麝香の香りと、使用済みの小瓶——漏れてしまったため半分も残っていない『精力剤』——が止めとなり、紙屑を見るような目つきで見下ろされることを。

長時間正座させられて、しこたま説教されるのを、何も知らない。

(精力剤……なんで持ってたんだろう?)  
後日、そわそわしているアイズと傷心のレフイーヤに、少年は事情の説明がてら全力で土下座しに行くのであった。

## デートの裏側で

「はい、ベート・ローガ。あーん♪」  
殺す。絶対に殺す。

満面の笑みで匙を差し出すレナを前に、ベートは血走った瞳で決意した。

北の大通り裏手、街路に沿った茶房の一角である。迷宮探索が終わった後、腹ごしらえのため立ち寄った店で、ベートは愚かにもこの様を迎えていた。「食べ終わったら露天商巡りするつもりなんだー」と幸せそうに語る眼前の少女が三倍増して憎たらしくしようがない。

ベートが直面しているのは、いわゆる『あーん♪』であった。

料理をすくって食べさせようとするあれだ。ロキがアイス達に懇願してやまず、くだらなさのあまりベートが唾棄し、絶対に俺はしねえと心に誓っていた羞恥プレイだ。

「あれ、食べてくれないの、ベート・ローガあ〜？ 食べてくれないなら私、『鍵』の心当たりを話せないくらい落ち込んだじゃうかもな〜」

「てめえ……!!」とこれ以上ないほど害虫を噛み潰したような表情を浮かべるベートに、ケーキを差し出すレナはニヤニヤとした笑みを浮かべた。

ベートに拒否権はない。人造迷宮の『鍵』の情報を得るためにも受け入れるしかない。とい

うかこれだけでも遂げないと絶対に情報を教えないとレナが譲ろうとしない。

(こんなところ誰かに見られる前にさっさと終わらせるしかねえ……!! クソツタレがあ!)

追い詰められたベートの思考はもはや、傷を負うならまだ浅い方がいい、という結論に転換しつつあった。ぎりぎりと思いつ切り歯を食い縛りまくる狼人は、覚悟を決めて身を乗り出し、匙を持つレナの左手を己の右手で握って引き寄せた。

「きゃつ、ベート・ローガ大胆!」

せめてもの抵抗として自分の力でケーキの塊を口に運んだ瞬間——まさかの時機で店の曲がり角から現れた白髪の少年が、その光景をばっちりと目撃した。

「えっ……」

「あ、【リトル・ルーキー】だ」

信じられないものを見たかのように言葉を失うベル、凍りつくベートを他所に、レナの暢気な声が響く。次の瞬間、狼人の顔から耳までかけて灼熱の羞恥が焼き焦がした。

「ご——ごめんなさあああああああああああああああああああああい!」

「おい待てエ!? 逃げんなア!? 勘違いするんじゃないやねええええええええええええ!!」  
何故か逃げ出した少年を追いかけ捕獲してみたベートは、脅迫まがいの言動で『今見たものを絶対に喋るな』と、そう誓わせたのだった。

## ギルティ!!

「お話を聞くのに時間がかかった……エルフィ達、もう先に集まってるかな」

アマゾネスの事情聴取を終えたレフィーヤは、都市の街路を小走りしていた。

人造迷宮の手がかりを集めようと派閥包みで街へと繰り出している昼時。手分けして情報収集している団員達と一度合流しようと、待ち合わせ場所へと急いでいると——「んん!!」と。

寄り添って歩く白髪の少年と金髪の少女の後ろ姿を、視界の端に捉えてしまった。

(あのヒューマンとっ、ア、アイズさん!? 他派閥の癖にまたあ……!)

急制動をかけたレフィーヤは言葉を失ったのも束の間、顔を真っ赤に染めた。

当初の目的も忘れて「こらあー!」と声を上げて少年、ベルのもとへ突貫する。

「うわあ!? レ、レフィーヤさん!」

「性懲りもなく貴方はあ! 一体アイズさんとなに、を……あ、あれ?」

ベルと一緒に驚く金髪の少女は、アイズではなく、狐人の少女だった。

よくよく見ればその格好はメイド服だ。何かの買い出し途中なのか二人で袋を抱えている。

「ア、アイズさん……? いや、この人は僕達の【ファミリア】に新しく入った人で……」

「は、初めましてっ」と頭を下げる狐人の少女を前に、レフィーヤの顔が羞恥に染まる。

【白髪＋金髪＝ベルとアイズ】という図式が頭の中に構築されていたが故の先走り、もとい盛大な誤認であった。レフィーヤ痛恨のミスである。

(うう大失態です。でも後ろ姿が何となく似てるしっ、間違えるのもしょうが、な……い)

戸惑う狐人の少女に目を向けていたレフィーヤの心の声は、尻すばみになっていった。

少女はとても綺麗だった。いや勿論アイズの方が綺麗だが? いやいやタイプが違うので

比べること自体間違っているが……とにかくレフィーヤが呆然とするほど可憐で美しかった。

どこかアイズを彷彿させる金の長髪に、彼女に負けないくらいの美貌、そんな少女と仲睦

まじく二人で歩く不屈き者……浮気?!

暴走するレフィーヤの頭脳は、次には大音声を解き放っていた。

「ア、ア、アイズさんという人がありながらっつ、浮気ですか貴女はあ!」

「う、浮気い!? ま、待つてくださいいっ、そもそも僕アイズさんと付き合ってたんか……!」

「当然ですっ何を言ってるんですか貴女はア!! ただアイズさんを差し置いて他の女性と一緒に歩いているのが許せないって言ってるんです!」

「りふじーんっ!」

「べ、ベル様と男女の仲だなんてっ……! ああ、春姫はもう……!」

通りのド真ん中でギャーギャーと騒ぐエルフとヒューマン、そして頬に手を当てて照れ恥じる狐人の三人組は、人々の注目を買うのだった。

だつてありえなかったから……

『お仕事やりながらでええから、それとなくベートの様子も見といてくれへん?』

人造迷宮の手がかりを得るため情報収集に繰り出す間際、アイズはロキにそんな指示を伝えられた。ティオナ達と衝突し「ファミリア」を出ていってしまったベートの搜索である。アイズにしかできる者はいない、という主神の言葉は心の中の幼女が『むんっ』と拳を握る程度には使命感を抱かせていた。気分はさながら極秘の命令を受けた特務員だ。

(まずはベートさんがいそうなところを探さなきゃ……)

館の外に出て、情報収集と並行しながらアイズはベートの行方を追った。『不安やったらレフィーヤ辺りに力を借りてもええ』というロキの助言を思い出し、素直に従うことにする。

『あ、レフィーヤ、ベートさんが行きそうな——』

『ア、ア、アイズさあーんっ!』

街中へ出て来た後輩を呼び止めようとした時、エルフの少女はこちらを認識するなり凄まじい速度で駆け寄ってきた。アイズをぎよっとさせるほどの迫力で口を開いたかと思うと、

「エルフィが言ってたんですけどっ、ベートさんが他派閥の異性とデートしてたって……!」  
突如、そんなことをたまった。

「……………」

それを聞いたアイズは、とても不思議そうに、首を傾げた。

「レフィーヤ……? 熱でも、あるの?」

「本当なんですアイズさん! 北の裏通りで見たって言うエルフィも腰を抜かして立てないくらいなんです!! だからそんな可哀相なものを見るような目を向けなくてください!!」

感情の乏しい【劍姫】の本気で心配そうな面持ちに、レフィーヤは説得と悲嘆を織り交ぜながら泣き叫ぶ。レフィーヤ疲れてるんだ、と自己完結したアイズは「北にいるんだね、ありがとう」と言っただけで別れた。「本当なんですアイズさあーん!」という悲鳴を音中で聞きながら。

(ベートさんが女の人とデート……………うん、ない、かな)

心の中で黒い特務員の服を纏った幼女も『ないなーい』と手を振りながら笑っている。

口を開いた一言目には「俺が弱い女が嫌いだ」と言っただけで女嫌いを公言しているベートだ、万が一にも億が一にも女遊びなどありえない。それを悟ってしまうくらいには仲間として長い時間を過ごしてきたのだ。断言できる。そう、アイズの思考が混濁し、常ならば言わない冗談を口にしてしまう程度には、ありえないことなのである。

「もし、本当にデートしたら……逆立ちしながら謝ってもいい!」

——それから三十分後。放心する彼女の心の中で、幼女が『すいませんでしたあー!!』とブルブル震えながら逆立ちして、渾身の謝罪を行うのだった。

## サヨナラの代わりに——アリガトウ

その最期さいごを前に、リーネはある日の情景を思い出し出していた。

——私はまた、ベートさんの言う『雑魚』ざごです。でもベートさん達を癒なぐさすことはできません。

——だから、私も貴方あなたに付いていつて……いいですか？

以前リーネがベートに尋ねた言葉。傷付いた彼の手を取って、治癒の光で癒しながら。

少女の弱さを責めていた狼人の青年は、時間を置いた後、答えてくれた。

『……勝手にしろ。治せるものなら、治してみやがれ』

そう言ってくれたのだ。嬉しかった。胸を高鳴らせる温もりが止まらなかった。いつか彼の『傷』を癒して、埋めてあげたい。そんな願いを抱くようになった。

けれど、それももう叶わない。

「てめえも、他の連中も無駄死にだ。自分の甘さと自分の弱さ、もう忘れねえように死ぬほど呪え。死ぬほど恥じる。ダセエ死に方にくたばった、この後もな」

ベートの嘲笑あざわらが響いている。息絶えた仲間とリーネの血に彩られた人造迷宮の石室に。

それが来世に向けられた言葉であることをリーネは理解していた。こんな時まで彼は強者の意地を貫き通す。強者としての責務を果たそうとしている。とても強い、傷だらけの狼おおかみ。

私がこの人を『傷付けて』しまった。治療師ヒーラーとしての約束を違えてしまった。それがとても悔しくて、申し訳なかった。彼の言う通り、最後まで『弱者』であった己を恥じ、悔いた。

「じゃあな。もう二度と俺の前に現れんじゃねーぞ。二度と、巢穴から出てくんない」

音が遠のいている。視界が狭い。避けられない死が間近に迫っている。

もうリーネの目は、ベートしか映していなかった。

少女の腕うでの中で、ベートだけを見つめていた。

喋れない唇くちびるの代わりに、絡めた視線に謝罪と後悔を滲ませるリーネに、彼は嘲笑を消す。

「馬鹿野郎……」

そして、最後にそう呟つぶやいた。

「お前の手に、十分救われた……」

リーネの目が見開かれる。

そして、その瞳ひとみから涙がこぼれ落ちた。

最後に小さな微笑を浮かべて、ゆっくりと目を閉じる。

安らかな表情で、ほのかな恋心が報われたように。

その温かな想いを胸に抱き、救われながら、少女は逝った。

彼女が最後に思ったことは一つ。

——この人を、好きになれて良かった。

## 鍛冶師の追憶

ああ、あれは死ぬ。それがアイズを初めて見た、椿の印象だった。

実は椿は直接契約を結ぶガレスから話を聞くより前に、金髪金眼の少女を見かけたことがあった。当時の椿はそれがアイズだとは認識していなかったが。

武器を試し斬りするために迷宮の『上層』を下る中、少女は鬼気迫る勢いで怪物を屠り続けていた。顔を汚しながら、いくつもの傷を負い、人形のような表情で——しかしその瞳を黒い炎に焼かれながら。少女は、まさに椿達鍛冶師が作り出す『剣』そのものだった。

無意識にせよ己を一振りの剣としてか捉えておらず、その剣身を酷使し続ける。

「まだ折れておらぬ剣なら、そこにあるであろう?」

だから、少女と初めて言葉を交わした時、椿はそう言っただけだった。

限界の果てを越えて、いつ折れるか。それだけが気になっていた。

（おや……?）

だが、いつかと同じようにダンジョンで少女を見かけた時、椿は首を傾げた。

怪物を必死に倒し続ける姿勢はそのまま、しかし以前とは異なり少女は『剣』である自分の体を乱暴に扱ってはいなかった。本当に僅かな差異だったが。

何より、戦闘が終わった後、お目付け役のハイエルフに汚れた顔を素直に拭かれる少女を見て、ほう、と思った。あの『人形姫』があのような表情をするとは、と。

「……あの」

「む? なんだ、また来たのか? お主の武器は打ってやらんと言っただろう」

そして、それから数日後のこと。ガレスに聞いたのか、アイズは椿の工房を訪れた。

一言目には断ろうとした彼女に、金髪金眼の少女は首を横に振った。

「剣、じゃない……髪留めを、作ってほしい」

うつむいて、その丸い頬をうつすらと染めながら。

「……誰かへの贈物か?」

「ち、ちがうつ。……ただ、伸ばしてる髪が……邪魔そう、だったから……」

か細い声を落とす少女に、椿は眼帯をしていない右眼を細め、笑っていた。

「いいぞ、作ってやる。あと代金は要らん。この仕事は、気が乗った」

驚くアイズを前に、椿は金の髪留めを片手間で作ってやった。顔見知りであるハイエルフの翡翠の髪に似合うよう、少女と並ぶその後ろ姿を思い浮かべながら。

——存外、この剣は折れんかもしれない。

将来、『剣』は鞘を見つけれられるかもしれない。

変わりゆく少女を前に、一人の鍛冶師はふとそんなことを思うのだった。

## 親の素質

「ほんま、リヴェリアも母親の貫禄が出てきたな〜」

「……ロキ、しつこいぞ。私をからかうな」

「はははっ、以前のように強く否定しないだけ、自覚はあるのではないか、リヴェリア」

本抛の執務室にロキ、リヴェリア、ガレスの聲が響く。

うららかな昼下がりに。たまたま集まった三人は気ままに会話に興じていた。今の話題は最近幼いアイズのことを追懐しては物思いに耽つているリヴェリアについてだ。

「リヴェリア、アイズたんの手がかからんようになって、実は寂しいんじゃないか〜」

「馬鹿を言うな、ロキ。あの娘の成長に喜ぶことはあれ、寂しがることなんてありえん」

「いやいや、わからんぞ。お主のことじゃ、いざアイズが伴侶でも見つけて巢立とうという時、何も言わず切なそうにしてそうじゃ」

「ガレスのアホォ！ アイズたんとこの馬の骨とも知らん野郎に渡すかァー！ うちのプリティーエンジェルアイズたんはずつとうちのもとで幸せに暮らすんじゃない〜」

「何でお主が怒つとるんじゃない〜」

はあ、はあ、と肩で息をするロキは、再びリヴェリアをからかうべく口端を持ち上げる。

「でもまあ、アイズたんがもし、本当にもし将来のお婿さんを見つけてきたとして……リヴェリアは口うるさそうやなく。お前なんぞに娘はやれん！ つて。フヒヒ〜」

ロキが何気なくそう言った瞬間、

「——当然だ」

リヴェリアの口調が、がらりと変わった。

「あの娘の伴侶はしっかりと見極めなくてはならない。愚かな輩などこの私が許さん。そうだな、具体的には理知的な人物が好ましい。エルフほどの教養、とまでは言わん。だが最低限の品性は必要だ。何より人格。これがなければ話にならない。あとは望むのは酷だとわかってはいるが、私が安心してアイズの隣を任せられる資格は欲しい。下品な言い方になるが腕つぶしということになる。アイズと添い遂げたければ私を倒してからにしろ、などと前時代的なことは言わないがせめてあの娘の同程度の力量がなければ。種族の問題はまあ目を瞑ろう、あの娘が愛しているというのなら少々思うところはあろうがドワーフだって祝福する。だが神々だけは絶対に除外だ。精霊に縁があるあの娘の傷を抉って——」

（……あかん、母親だけやなくて父親属性も持つとった）

（本当にエルフは面倒くさいのう……）  
滔々とアイズの伴侶について語るハイエルフを前に、ロキとガレスは遠い眼差しをするのだった。

少女と狼おおかみのその後

「いきなり『俺と一緒に来い』だなんて、ベート・ローガったら乱暴なんだから！ でもそんな強引なところが好き！」

「黙ってるガキ女！」

日が沈み、月が輝く夜。オラリオの南西部『歓楽街』、その中の『復興区』アツツネスウエリアウチで少女と狼人の声が鳴り響く。その後方では、『ロキ・ファミリア』の女性陣が付いてきていた。

迷宮都市に攻め寄せた王国との開戦から五日目の夜。撤退することを決めた『ロキ・ファミリア』の中で、ベートは同じ戦場にいたレナ・タリーを強引に連れ出した。宙づり状態になっている人造迷宮の『鍵』の捜索を再開させるためだ。今はレナがそれらしきものを見たという『女神の宮殿』ベイト・パビリに向かっている最中である。

「ベートうるさーい。ギルドに見張り役に見つかっちゃうじゃーん」

「しかも結構、満更じゃなさそうよね」

最有力の『鍵』の手がかりを求めて大所帯でぞろぞろと移動する中、ベート達の後方でテイオナとテイオネが間延びした声を出す。

「もう結婚しなきゃばいじゃーん。その娘ちよつとアレで怖いけどー」

「そうよ、あんたを好きになってくれる物好きなんてリーネとその娘以外ないわよ」

「ありがとう、同胞！ レナちゃんはベート・ローガと結婚しまーす!!」

「蹴り殺すぞ糞アマゾネスどもオ!？」

レナが片手を上げて満面の笑みを浮かべる横で、ベートの怒号が爆散する。憤激する彼はやっつけられるかとテイオナ達を置いてさっさと歩いていく。レナは慌ててその後を追った。そして、二人だけで肩を並べた時、レナはふざけた素振りを消す。

ほのかな笑みを浮かべながら、ベートの隣で囁いた。

「ねえ、ベート・ローガ」

「あんだよ」

「お花、ありがとう」

ベートの肩が揺れる。

「覚えててくれて、嬉しかった」

「うるせえ」

「あそこにあつて、涙が出そうになった」

「うるせえ」

「ありがとう。大好き」

「……うるせえ」



## ビギナーズ・ラック？

「何をやっているのですか、一体……」

酒場の休憩時間。丸卓を挟んで切札に興じているシルとベルを見て、リユーは呆れた表情を見た。顔を上げたベルは「あ、リユーさん」と空笑いをする。

「アーニヤさん達にいきなり捕まっちゃって……ポーカーの規則、よく知らないんですけど」「白髪頭、ミャー達の仇を討つのニヤア!」「戦争遊戯も制した少年の幸運でこの女に一矢報いるのニヤツ……! シル死すべし!」「頼んだよ、冒険者君!」

自分達の恨みつらみにベルを巻き込む同僚達に、リユーは嘆息してしまふ。

一方、少年の対面でにこにこ笑うシルは勝者の余裕を崩しはしない。

「これで負けた方は言うことを何でも聞かなくていい約束なの。ベルさん、今の私の手札はフルハウスかもしれないよ?」

容赦なく兎を狩りにいくシルに「ちくしやう、また神引き……!」「もうダメニヤ、おしまいニヤア……!」「白髪頭使えねえニヤ」とルノア達が口々に天を仰ぐ。嘘を見抜ける『眼』まで駆使するシルは「え、え?」と困り果てるベルにもらつたと確信したのか瞳を光らせる。間もなく勝負の時を迎え、予告通りシルはフルハウス。一方のベルは、

「あ……駄目です。ペアが一つしかできないや、あははは……」

これは自分の負けだと苦笑しながら手札を卓上に広げる。開示されるのは貨幣の6と同マークの10、8、7、そして道化師。リユーはその手役を見て……愕然とした。

「クラネルさん……それは、ストレートフラッシュです」

指摘した瞬間、「二三?二三」とベルやシル、アーニヤ達の目が点になる。

彼女の言う通り、全てはよく規則を把握していない、初心者者が招いた珍事だった。シルの『眼』がいくら相手の胸中を読み取ろうと、本人が手役を理解していなければ何も意味がない。

「白髪頭でかしたにやああああああああああああああああああああああああああ!!」

「イヨッシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「シルざまああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「え、えええ……!!? うそおー!!」

狂喜乱舞するアーニヤ、クロエ、ルノア、そして涙目のシルの叫び声が響き渡る。

まさかの初敗北を喫した街娘は、少年から命令権を奪った同僚達によって、全ての雑用を押しつけられる羽目となった。

「無垢の幸運……恐るべし」

酒場に「オラオラ働くニヤア!!」「ふえくん!」と少女達の声が木霊する中、リユーは啞然とするベルを横目に、そう呟いてしまったのだった。

## 幻の二人目師匠

「来て頂いてありがとうございます、クラネルさん。これからよろしくお願いいたします」  
 「こ、こちらこそ!?!」

朝焼けが始まっていない早朝、酒場の内庭。差し出されたリユーの手をベルが握った。  
 大賭博場の騒ぎから数日後。リユーと約束を結んでいたベルは朝稽古に臨もうとしていた。  
 木刀を持って簡素な格好をしている彼女を前に、刃を潰した訓練用のナイフを持っている。

「こちらの我儘に付き合っ頂いて、本当にすいません。こんな朝早くから……」

「い、いえっ！ 僕もリユーさんみたいに強い人と訓練ができるなんて願ったりですし！」

ベルは慌てながら「僕だっで強くなりたんです！」と本音を語る。憧憬に追い付くため、  
 こうして凄腕の元冒険者に稽古に参加させてもらうのは非常に有意義なものだった。

(アイズさんにも教えてもらったけど……リユーさんが二人目の師匠、なあって)

と、くすぐったく思いながらも笑っていると、対面にたたずむリユーは目を細めた。

「いい目だ……そうですね、シルの隣に立つのなら強く在らなければ」

「えっ」

「最初は私の鍛練に付き合ってもらおう程度に考えていましたが、予定を変更しましょう。クラ

ネルさんの鍛練も合わせて実戦形式で進めていきます」

何か今、意味のわからないことを言われた挙句、非常に不穏な空気が流れ始めていることを  
 直感したベルだったが、時はすでに遅かった。

「――行きます」

眼差しを鋭くする宣言のもと、エルフの容赦のない鍛練が開幕する。

ベルは、そこから先の記憶をよく覚えていない。

「立ちなさい。次」

「何を寝転んでいるのですか。次」

「敵が悠長に待ってくれるわけではない。死にますよ。次」

「次」『次』次『次』次『次』次『次』次『次』次『次』次

気付けばポッコポッコにされており、バタリと倒れ伏して、冷たい地面と接吻をしていた。

(リユーさんも、普通に酷烈……)

L v. 3 になった筈の少年は、L v. 4 のエルフにあっさりと意識を刈り取られるのだった。

「……………やり過ぎました」

「やり過ぎました、つて、リユーそんなレベルじゃニヤいニヤー!?!」

ボロ屑と化した少年を見下ろし黙りこくるリユーが、店員の悲鳴を聞きつけたシルによつて折檻されるまで、あと二十秒。

その時、リユー・リオンは体を震わせた

「はあ……」

迷宮都市に存在する、とある一軒家。

ヒューマンの美少女が、窓辺の日差しを浴びながら甘い溜息をついていた。

自分達の可愛い一人娘、アンナのその姿に、傍から見守るクレーズ夫妻は視線を交わす。

「なんだ、なんなんだ、あの悩ましげな溜息は……どこか熱っぽくもあるような……」

「あれを見てもわからないのかい？ これだから男は」

そわそわと心配を募らせる夫のヒューイに、妻のカレンはしたり顔で笑った。

「あれは恋をしている女の顔だよ。アンナ、ようやくいい人を見つけたんだろ」

「な、なにイ——!?」

衝撃を被るヒューイは座っていた椅子から立ち上がった。読む振りをしていた情報紙を放り投げ、可愛い一人娘のもとまでダッシュする。彼の脳裏に過るのは可愛い一人娘を育ててきた幸せな記憶、そしてどここの馬鹿野郎とも知れない糞野郎が花嫁姿のアンナの肩を抱いて笑っている忌々しい未来の光景であった。

カレンも微笑ましそうに後を付いてくる中、ヒューイは冷静を失った声で問いただす。

「ア、アンナ!? お、お前っ、好きな人が……!?」

「お父さん………うん」

こくりと恥じらいながら頷く娘の姿に、「イヤァー!?」と父親が女のような絶叫を上げる。

「私……好きになってはいけない人に、恋をしているみたい……」

「だっ、誰だっ、誰なんだそいつはア!?」

にやにや笑うカレン、血の涙を流すヒューイの様子に気付かないまま、ひゃあ、と赤くなつた顔を両手で隠しながら、アンナは言った。

「私を助けてくれて、凛々しくて、優しい人……でも、同じ女の人の……!」

(あつ)

(あつ)

察したヒューイとカレンは一瞬の硬直後、すぐに真顔となった。

頭のおかしな神々が言うところの『百合キターー!』であることを理解したのだ。

「………まあ、どここの馬の骨とも知れない野郎より、同じ女でもあの御方の方が……」

「ちよつとアンタ!?」

重い沈黙の後にぼつりと眩くヒューイに、カレンが鬼の形相を浮かべて下つく。

ギャー!? と両親の間から悲鳴が散る中、アンナは恋する少女の瞳で、ぼーっと窓の外を眺めるのだった。

## 本屋デート？

「クラネルさん？」

暖かな陽気に包まれる昼下がり。

酒場の買い出しに出ていたリユーは、街角でばったりとベルに出くわした。

「あ……リユー、さん」

声に反応したベルは、あからさまに「しまった」という表情を浮かべた。

ウエイトレス姿のリユーに対し、少年は冒険者の装備を何も身に付けていないごく一般の普段着。両腕にはあるものを抱えている。

何冊も積み重ねられている、分厚い本だ。

「その本は？ どこかに運んでいるのですか？」

「は、ははは……いや、その」

運んでいるのなら手伝おうか、という意味も込めて尋ねると、下手な空笑いが返ってくる。

汗を流し、頬をうつつすらと赤らめ、本を庇いながら、じりじりと後退するベルに、リユーは空色の瞳を鋭く細めた。後ろめたいこと——それこそ抱えているものの正体がだらしない男神達が好むようないかがわしい本ではないかと思っただのだ。

もし本当であるなら看過できなかった。少年を慕う同僚のこともある、潔癖なエルフの性を発揮したリユーは目にも止まらぬ速さで肉薄を仕掛けた。元第二級冒険者の速攻である。

ぎよっとするベルから、抱えている本の一冊を抜き取る。

「ほあっ!？」

「これは……童話？ いや、『英雄譚』？」

奇声を上げるベルを他所に本を開くと、視界に飛び込んでくるのは一枚の挿絵であった。

巨大な怪物に向かって凍える吹雪を放つ、エルフの女勇者。

「いやっ、これは、その……! 本抛の書庫を整理していたら、子供の頃に読んだ本を見つけてっ、読んでたら懐かしくなっちゃって……!？」

「……」

「それでっ、あの、今日はダンジョン探索が休みで……せつかくだから、本屋を梯子して集めてみようかな、なんて」

慌てふためいた弁解は次第に尻すばみとなっていく、最後は消え入りそうな声で呟く。

この年になって『英雄譚』を集める姿を見られなくなかったのか、ベルは今や恥じらいで赤くなった顔をうつむけていた。

話を聞いたリユーは珍しくきよんとんとしていたものの、すぐに微笑ましく思った。みっともないなどは欠片も思わず、むしろ彼らしいと。

それと同時に、ベルを疑ってしまったことに後ろめたさも覚えた。

「……袋は、用意していませんですか？」

「持っていたんですけど……さっき、底が破れちゃって」

本を返しながら尋ねると、ベルはまた恥ずかしそうに苦笑する。

リユーはそれを聞いて、間を置かず申し出た。

「では、私も付き合いますよ」

「えっ？」

「その本の量は凶悪だ。手を貸します」

挙動不審だったとはいえ、ベルを疑ってしまった自分が許せなかった。要は、生真面目なエルフの罪滅ぼしである。

こちらの提案に、ベルは目に見えて恐縮そうにした。

「そ、そんな、悪いですよ。それにリユーさん、今はお店のお使い中なんじゃあ……」

「買い出しは夕刻までに間に合えばいい。心配しなくても大丈夫です。それに……」

恐れ入るベルを説得しようと、リユーは咄嗟に考えた台詞を告げた。

「この旅はきつと大変なものになる。なにせ、英雄の活躍が綴られた伝説を求めて、この広い迷宮都市を渡り歩くのですから」

伝説の古文書を探して冒険をする英雄譚にかけて、そんな言い方をする。

気恥ずかしもあつたものの、リユーなりの洒落にベルは瞬きを繰り返した後、とても嬉しそうに破顔した。まるで、姉に英雄譚を読み聞かせてもらええる子供のように。

「それじゃあ……よろしくお願いします。僕のお騒がせな旅の、仲間になってください」

「ええ。お供します」

つられて微笑むリユーは、少年の英雄譚探しに同行することとなった。

まずは丈夫な手提げ袋を二つ購入し、本を詰め、都市の東部を中心に見て回った。

ベルが探す英雄譚はいわゆる『通』な本ばかりで、一箇所で揃うことはなかった。無所属の獣人が営む書店、地面に敷いた外套の上に品を置く路地裏の露天商、交易所で開かれている蚤の市。薄暗い店内で背伸びをして本棚に手を伸ばしたり、二人並んで腰を折り蚤の市に出された本の背表紙を眺める。リユーが教えてもらった題名を発見すると、ベルはその度に喜びの声を上げた。

図らずとも、本探しの旅は古書店巡りとなっていた。

「リユーちゃん、リユーちゃんっ」

「？」

ベルと街路を歩いていると、リユーは声をかけられた。

相手は酒場の買い出し先でお世話になっている、気のいい年配の女性だ。

ベルに断りを入れ、リユーは手招いてくる彼女のもとに足を運んだ。

「あなたもとうとう『いい人』を見つけたんだねえ！」

「……？」

「またまたとほけちゃって！ デートしてるんだらう、今？」

声の調子が高い女性の言葉を理解するのに、リユーはしばしの時間を要した。

「シルちゃんもよくできた娘だけさあ、あなたもそんなに美人なんだから早くいい人が見つからないかって思ってる……男っ気がないから心配してたけど、安心したよ！」

離れた場所で話が終わるのを待っているベルと、自分の姿を見返す。

お互いお揃いの手提げ袋を片手に持った格好。

先程まで肩を並べて談笑しながら、のんびりと古本屋巡り。

なるほど、確かに傍から見れば、デートと呼べるものに映るかもしれない。

なるほど、なるほど……それは不味い。

「しかもあれ、戦争遊戯に勝った【リトル・ルーキー】だらう!? お目が高い——」

「デートではありません」

「えっ、でも——」

「デートではありません」

「リユ、リユーちゃ——」

「デートではありません。あと決してこのことはシルに言わないでください」

「は、はい」

言葉を再三遮る語気、断固とした口調。

真顔で迫るリユーに、得意先の女性はこくこくと頷いた。

(デートなどでなければ他意もない。それは揺るがない。しかしシルに途方もない後ろめたさが……もうクラネルさんとは別れた方が……いやそれではいい加減過ぎる……ありもしないことを疑って置いてこちらの都合で放り出すなど、恥の上塗りに……)

女性のもとからベルのもとまで戻る途中、凄まじい葛藤がリユーの胸の内でも発生した。

少女への背徳感と少年に対する謝意の板挟みにあいながら、生真面目に煩悶する。

「リユーさん、何かあったんですか？ お知り合いの方みたいでしたけど……」

「……いえ、何でもありません。行きましよう」

ベルのところまで戻ったリユーは、結局本探しを続けることにした。

心の片隅で、同僚の少女に謝罪をしながら。

「結構集まりましたね……ありがとうございます、リユーさん」

「お役に立てたのなら私も嬉しいです」

散々歩き回った後、二人は中央広場の東側に設けられた木椅子に腰かけた。

足もとに置いた袋はすっかり膨らんでいる。目当ての英雄譚を数多く見つけることができたベルはご満悦そうだった。その顔を見て、リユーも目もとを緩める。

「リユーさんは子供の頃、英雄譚を読んだりしていましたか？」

「いえ、私の家系は守り人……里を代々守る番兵の一族だったので、あまり縁はありませんでした。都市に来てからも……もしよろしければ、話を聞かせてくれませんか？」

側にある噴水が日差しを反射してきらめく中、リユーがそう言うと、ベルはぼつと顔を輝かせた。興奮した兎のように、身を乗り出してくる。

「わかりました、任せてください！ えっと、何がいいかな、『迷宮神聖譚』は流石に有名だし、『ジェルジオ聖伝説』は……逆にちよつと知られてないし、うーん」

袋の中から本を取り出し、いつになく饒舌になるベルにリユーは面食らってしまった。それと一緒に新鮮な感情を覚えた。

こんな一面も、よく知る話題に夢中になる年相応のところもあつたのだと。

「それで、お祖父ちゃんはその『アルゴノウト』っていう話が好きだって言ってる……」

ベルはリユーの知らない物語を沢山知っていた。沢山の話を詳しく教えてくれた。

英雄譚について話す彼の赤い瞳は、きらきらと輝いていた。

まるで寶石のように、それこそ深紅石のように。

耳を傾けていた筈のリユーは、己の視線がその輝きに引き込まれ、胸の奥が穏やかになっていくのを感じた。

とても優しい気持ちになり、心地良い甘い疼きを覚える。

リユーは無意識のうちに、微笑とともに唇を開いていた。

「私は……英雄譚を語る時の貴方が、好きなようです」

小さく眩かれた、その言葉は。

話に夢中になっていた少年の耳にも届いた。

「えっ……？」

固まったベルの顔が、たちまち紅潮する。

その様子にはっとしたリユーは、自身の頬も熱くなったのを感じた。

「いや、今のはっ……その、変に捉えないでください。あくまで微笑ましいというか、無邪気な子供のようというか、そういった類の感情で……」

「こ、子供………ですよねー」

慌てて言い直すと、ベルはがっくりと肩を落とす。

自分でも気にしていたのか激しく落ち込む少年に、リユーは失態だったと言い直そうとするが、上手く言葉が続けられなかった。

頬の熱が引かず、鼓動の音が落ち着かない。

小振りな唇をうつつすらと開けては、閉め、それを繰り返してしまふ。

(嘘じゃない……)

一瞬、目を伏せて、胸の内の思いに瞳を向ける。

(沢山の物語のように輝く、あの綺麗な瞳が……好きだ)  
偽りのない気持ちに辿り着き、リユーは顔を上げる。

「クラネルさん……先程口にした言葉は、嘘ではありません」

木椅子に座りながら、視線を合わせず、前を向く。

飛び散る噴水の水を眺めながら、顔を上げたベルに、言葉を紡いだ。

「だから……また、話を聞かせてください」

——貴方の綺麗な瞳を見たいから。

胸が想う願いを、言葉を変えて伝える。

そっと少年の手から英雄譚を受け取り、膝に置くと、相好を崩す気配がした。

「はいっ」

屈託ない声が細く尖ったエルフの耳を震わせる。

英雄譚の表紙を愛おしげに撫でながら、リユーは目を瞑り、顔を綻ばせた。

## 5 YEARS AFTER ~ Side Ais ~

これは夢だ。

少女にはすぐわかった。

少し大きくなったアイズは、リヴェリアと一緒に旅をしていた。

オラリオではないどこか。丘の上を上り、美しい大平原に感嘆して、視界の奥の風車がある村を目指す。空は晴れ渡り、のどかで、優しくかった。

隣でふっと目を細めるリヴェリアにアイズも唇を曲げ、母子のように笑みを交わす。

幸せな夢。

これは夢だ。

少女にはすぐわかった。

ちよっとだけ大人びたアイズが、ティオナが、ティオネが、レフィーヤが、小店で楽しそうに談笑している。ティオナは今も昔も変わらないようにケラケラ笑い、ティオネは今年こそ想い人と同棲すると息巻き、一番垢抜けたレフィーヤは優雅に紅茶を口に運ぶ。

それをアイズは楽しそうに眺めていた。少女よりもずっと柔和な表情で。

温かな夢。

これは夢だ。

少女にはすぐわかってしまった。

傷だらけのアイズ達は倒れていた。深い迷宮の奥で、血を流し、身じろぎ一つせず。

フィンが、リヴェリアが、ガレスが、ティオナが、ティオネが、ベートが、レフィーヤが、【ファミリア】のみんなが。

悪意を滲ませる闇の迷宮に屈し、力つきて、全滅していた。

閉じられたアイズの瞼は開くことはなかった。

悲しい夢。

これは夢だ。

少女にはすぐわかってしまった。だって、ありえなかつたら。

母親のように美しく成長したアイズは、『女王』になっていた。

人里離れた森の秘境の奥、凄烈な泉が広がる精霊郷。宙に浮いたり泉に浸かったりしている自我の薄い『精霊』達にやんやんやんと持て囃され、ちよこんとお人形のように王座に腰かけている。白い布を巻きつけただけの服で、頭に葉と蔓の冠を装備しながら。

てやー、と杖を掲げてなんか光を放ちながら、喜ぶ精霊達と戯れている。  
少女は咳き込みそうになった。  
よくわからない夢。

「これは夢？」

少女にはわからなかった。

剣が、槍が、斧が、杖が、盾が。

まるで墓標のように荒野に突き立ち、アイズを取り囲んでいた。

アイズは片腕が千切れていた。片目を失っていた。体に穴が開いていた。全身を血に染めていた。罅割れて半身を喪った武闘達の中で、ただ一人、その「闇」と対峙していた。

残った瞳を見開きながら、執念の形相で剣を振り上げる。

悲願を、悲願を、悲願を！

血を吐きながら叫び、凄まじい風を起こし、銀の剣を輝かせる。

だが「闇」は、ふっと息を吹きかけるように、暗黒の波でアイズを呑み込んだ。

それで終わりだった。その夢はそこで潰えた。

そして残念なことに、その夢はどの夢よりもアイズを引き付けた。

まるでこれこそが辿るべき終局のように。

変えられない定めのように。

やがて

全ての夢が遠ざかっていく中、少女は最後に一つの夢を見た。

それは背中だった。

膝を地に落としたアイズの前に立つ、傷だらけで、雄々しい一つの背中。

何故かはわからない。だが、少女にはその背中の意味がわかった。それは――

『君の為の英雄』

アイズは静かに、目を覚ました。

白いカーテンの隙間から日の光が差し込んでいる。聞こえてくるのは小鳥の囀り。朝だ。

「夢……？」

よく覚えていないが、幸せな光景も、悲しい光景も、不思議な光景も見た気がする。

五年後、あるいは十年後、二十年後。

迎える未来は何を描くのか。

寝台から立ち上がったアイズは、側にある愛剣を抜き、騎士のように構え、目を瞑る。

やがて装備を纏った一人の剣士となり、扉を開いて、今日も未来へと進み始めた。

●本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権およびその他すべての権利は、SBクリエイティブ株式会社または正当な権利を有する第三者に帰属します。

●本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

## GA文庫

5周年記念 書き下ろし付き スペシャルストーリー集 [外伝編]

ダンジョンに会いをを求めるのは間違っているだろうか外伝

ソード・オラトリア

著：大森藤ノ

イラスト：はいむらきよたか イラスト原案ヤスダズヒト

発行人 小川 淳

発行所 SBクリエイティブ株式会社

〒106-0032

東京都港区六本木2-4-5

装丁 FILTH

2018年2月1日 電子第一版発行

©Fujino Omori

## 【掲載出典一覧】

タイトル		配布店舗
番せ替え剣姫(ドレスアップ・アイズ)	外伝1巻特典	アニメイト
ていおにゃん	外伝1巻特典	ゲーマーズ
合体事故	外伝1巻特典	とらのあな
ユニコーンを追って	外伝1巻限定版特典	
アイズ・ヴァレンシュタインは白兔(しろうさぎ)の夢を見るか	外伝2巻特典	アニメイト
惚れ込んだ理由(わけ)	外伝2巻特典	ゲーマーズ
策士魔導士純情系(じゅんじょうけい)	外伝2巻特典	とらのあな
恋せぬ乙女	外伝2巻特典	Amazon
特訓ブーム	外伝3巻特典	アニメイト
アマゾネス流喧嘩術	外伝3巻特典	とらのあな
男の矜持	外伝3巻特典	ゲーマーズ
密会の行方	外伝3巻特典	Amazon
My Memory	外伝3巻限定版特典	
聖女にもわからないことがある	外伝4巻特典	アニメイト
Who is your rival?	外伝4巻特典	とらのあな
大乱闘スマッシュアドベンチャーズ	外伝4巻特典	ゲーマーズ
決戦前夜の攻防	外伝4巻特典	Amazon
犬の恩返し?	外伝5巻特典	ゲーマーズ
怨敵呪うべし。慈悲はない	外伝5巻特典	とらのあな
王族と敬愛	外伝5巻特典	一般書店
私も入れて	外伝5巻特典	アニメイト
惚れられた弱み?	外伝6巻特典	ゲーマーズ
恋せよ乙女、もとい戦士達	外伝6巻特典	メロンブックス
小さな料理店(レストラン)での後日談	外伝6巻特典	アニメイト
在りし日のトラウマ	外伝6巻特典	とらのあな
コクハク?	外伝7巻特典	とらのあな
アイは貴方の胸に	外伝7巻特典	アニメイト
走る少年少女	外伝7巻特典	ゲーマーズ
アマゾネス劇場	外伝7巻特典	メロンブックス
迷宮街の恋愛話・裏	S07巻限定版短編	
デートの裏側で	外伝8巻特典	とらのあな
ギルティ!!	外伝8巻特典	メロンブックス
だってありえなかったから……	外伝8巻特典	アニメイト
サヨナラの代わりに――アリガトワ	外伝8巻特典	ゲーマーズ
鍛冶師の追憶	外伝9巻特典	メロンブックス
親の素質	外伝9巻特典	とらのあな
少女と狼のその後	外伝9巻特典	ゲーマーズ
帰還の後	外伝9巻特典	アニメイト
ピギナーズ・ラック?	リュウ外伝特典	アニメイトとゲーマーズ
幻の二人師匠	リュウ外伝特典	とらのあな
その時、リュウ・リオンは体を震わせた	リュウ外伝特典	メロンブックス
本屋デート?	リュウ外伝特典(電子用)	電子のみ
5 YEARS AFTER ~Side Ais~	5周年用書き下ろし	